

---

# 闇守護業 8 《虹夜》

祐太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇守護業 8 《虹夜》

### 【Nコード】

N5815C

### 【作者名】

祐太

### 【あらすじ】

近未来の日本には、荒廃した無法地帯『裏社会』があった。そんな光の届かぬ闇の世界で、守護を貫く者達がいる。『闇守護業』第八話は、様々な人間が集う素敵惨劇クリスマスイヴ！愛の探偵団、大乱闘！？

## 《聖夜の願い》

かつての冬、聖なる日、愛を知らぬ子が生まれた。

子は嘆きと絶望と僅かな悲しい温もりを覚え、やがて男に成長した。

今年も、聖なる日は訪れる。白い闇を引き連れて。

愛を知らぬからこそ、冷め切った身体で、男は願う。

白い闇から大切な者を護りたいと。

繋いだ手から伝わる優しい温もりを、離したくないと。

そう、男が蒼の旋律に託した想いはたった一つ———  
『。』。

## 主な登場人物紹介（前書き）

主たる登場キャラクターの紹介です。

『闇守護業』はシリーズ物で、この紹介を読めば初めての方でもほぼわかりただけかと思いますが、出来るだけ前作を先にお読みくださることをお勧めします。

## 主な登場人物紹介

『闇守護業』やみしゅごぎょう 主な登場人物

蒼波そうは 遼平りょうへい…21歳

紺色のやや長い髪は寝癖でいつもボサボサ、瞳は漆黒。裏警備会社《ロスキーパー》中野区支部社員の男。元・東京最強のグループ『スカイ』を裏切ったため、「最低最悪の裏切り者、《邪鬼の権化》」と呼ばれている。

『音の民』蒼波一族の末裔で、普通人間には聞こえない超音波を聞き取り、発する能力を持つ。聴覚が非常に優れており、蝙蝠との意思疎通まで可能。肉弾戦が得意。

面倒臭がりでキレやすい。頭の回転は鈍く、ほとんど勘で行動。ふざけた態度と感情的な言動、かなり野生的。自己中心的な性格。

純也じゅんや…？歳

白銀の髪、ライトブルーの双眸。裏警備会社LK中野区支部の社員兼治療員担当の少年。見た目は15〜6歳程度で、現在は遼平のアパートに居候中。

2年前、遼平に拾われた時以前の記憶が無く、覚えているのは自分の名前らしき『純也』と膨大な医学の知識だけ。どこの誰なのかは一切不明。風を操る不思議な特殊能力があるが、普段は専ら合気道に近い武術を使う。

穏やかで非常に優しく、記憶力・洞察力に長けるが子供っぽい。とても知能が高く、感受性豊かで、好奇心が強い。趣味は料理と折り紙、更に大食い。身長が低く遼平より頭一個分下。人や動物を傷つけることを嫌い、殺生を憎む。

霧辺 きりべ 真 しん…25歳

金の跳ねた短髪。眼は黒で、皮膚は浅黒い。裏警備会社LKの若き中野区支部部長。関西弁を話す、自称『愛の警備員』であり、過去の連続殺人犯《斬魔》ザンマでもある。

普段は腰に下げた木刀で敵を薙ぎ払うが、それは鞘であり、中に凶刃『阿修羅』が収まっている。閃斬センザン白虎流剣術の使用者。

いつもは賑やかな遼平達の傍観者だが、最近は特に部下にイジられ気味。メンバーの中では最もマトモな感性の持ち主で、責任感が強く、広い視野から物事を見極める事の出来る貴重な人物。最近、メンバーの非常識な言動に胃葉が手放せない、苦勞人。一度暴走し始めてしまった部下（主に遼平）を止める為、ハリセンを常に携帯している。実は物凄い愛妻家。

紫牙 しが 濤斗 れいと…22歳

淡緑色、ストレートな短髪。瞳は暗褐色。かなりの美男。裏警備会社LK中野区支部社員の男。大富豪「氷見谷」家の次男であり、かつて暗殺成功率百パーセントの殺し屋、消去執行人エクスキューションナーとの異名を持つていた。

仕事中にかけている眼鏡は別に目が悪いわけではなく、希紗の作った照準グラス。ちなみに、濤斗が専ら使用するカートリッジ式銃『ノア』も希紗の手製で、照準グラスと連動している。実は愛用のリボルバー式マグナムもあるが、希紗の前では使いたがらない。

冷静で寡黙、他人の感情に鈍く、時に冷酷でもある。プライドが高く、遼平の挑発にのることもしばしば。慎重で、人間不信な面もあるが、根は生真面目で頑固。笑うことは滅多に無く、人間に興味無し。遼平とは犬猿の仲。

安藤 希紗：20歳

茶髪、ポニーテール。やや茶色の瞳。裏警備会社LK中野区支部の社員であり、メカニッカーであり、紅一点。

巡回などより監視室での監視、警備員の装備品の制作、監視システムの改良などが主な仕事。非戦闘員だが、彼女の支援なくして支部社員は戦えない。

明るく常に元気で、チームメンバー曰く『遊び心の塊』。どんな状況でも空気で突き進む、支部のムードメーカー的存在。過去のトラウマにより、拳銃を恐れている。実は、少女っぽく繊細な一面も。彼女の自称《女の勘》は時に驚異的に的中する。密かに滯斗を気にしているらしい。

「裏警備会社 Lose Keeper」

『裏社会』……近未来日本の、犯罪が絶えない無法地帯。そんな社会に、《守護》を仕事とする変テコで一流な警備会社、それが『ロスキーパー』。

これは、影を背負いながらも《守護業》を貫く、おかしな人間達の物語――。

## PL『白と朝陽』

依頼8 《聖夜パニック!》セイヤパニック!

PL『白と朝陽』

珍しいくらいに、その朝は平和かつ静かに訪れていた。

台所で鼻歌混じりにフライパンを振るう少年が、片脚のターンで食卓に向き直って皿に卵焼きを乗せていく。予定通り、やがてトースターが食パンを焼き上げた音が鳴る。

一通りの朝食の準備を終えて少年が一息吐いた時、不意に個室に繋がるリビングのドアが開いた。パジャマ姿の紺髪の男が、あくびをしながらリビングに出てくる。

「あれ、今日は自分で起きたの? お休みだからもう少し寝てるかと思ったんだけど。おはよう、遼」

「あー、おう……純也」

ボサボサの頭髪を掻き乱しながら、まだ眠そうに遼平はそれだけ返す。低血圧で気分が優れないながらも、純也に八つ当たりするでもなく顔を洗いにいった。

珍しい特別休暇の日で、今日は支部ごと休み。それでも依頼が入れば緊急召集がかかるが、普段でさえ滅多に仕事なんか来ないのでその心配はいらないだろう。折角の休日、遼平のことだから一日中



寝ているかも、と思っていた純也は僅かに驚いていた。

「少し時間がねえな……。朝飯は？」

「そこにあるの、食べていいよ。ドコか行くの？」

「……ちよつとな」

何かに急いでいる遼平に、先程作った朝食を指差す。本当は純也の食事で、遼平のものは起きてから作るつもりだったのだが、察しの良い純也は何も言わずに譲る。だが、どう見てもその食事の分量は純也用だったが。

「俺、流石に朝からトースト四枚は食べねえんだけど」

「いつも三枚は食べるじゃん。いいよ、残してくれれば僕食べるから」

「俺、いくらなんでも起きた途端に卵三つ分のスクランブルエッグは食べねえんだけど」

「いつも卵二つ分は食べるじゃん。残してくれれば僕食べるから」

「……俺、これ以上背を伸ばす必要が無いから牛乳一リットルは飲みたくねえんだけど」

「いいってば、僕が全部飲むか……。って、なんか今の一言腹が立つんだけど！ なに？ それは僕にカルシウムを譲ってくれてるわけ？ それが遼平の柔らかい嫌味っ？」

頬を膨らます純也に苦笑して、トーストをかじりだす。水を注いだコップをわざと大きな音を立てて卓上に置く少年。パンが喉に詰まる遼平は、コップを取って水を流し込む。

「下手に頭いいと勝手に嫌味が聞こえて不便だなあ、オイ。身長に

ついて自意識過剰なんじゃねーの？」

「遼にはわかんないよっ、背が伸びない僕の悩みなんてっ！」

「俺がお前の歳ぐらいの時はもう百七十はあったからなあ。牛乳を毎朝一リットル飲んでるくせに伸びねえなんて、返って不思議だな。成長魔王に『背の伸びない呪い』でもかけられてるんじゃないかねの？」

「えっ、そんな魔王がいるの!？」

「おう。悪いことをすると、子供の成長を妨げる魔王だ」

「ええっ!？」 遼が成長できたのに僕はダメなのー!？」

「……お前、俺がガキの頃から悪いことしてたってのは決定事項なのか？」

確かに間違ってはいないが。

やっぱり簡単に遼平の嘘に騙される純也は、人が良いのか子供っぽいのか。知性は高いが人を信じやすく、遊ばれることはしょっちゅうだ。

「僕何の悪いことをしたのかなあ？ どうすればいいのっ？」

「あー？ そうだな……逆立ちして『鬼は外ー、福は内ー』って叫びながら町内一周すれば？」

「えっと逆立ちして……って、この体勢でそんなことしたら成長以前に通報されない？」

とりあえず逆立ちしてみても、逆さまに見える男の顔を訝しげに睨む。心底おかしそうな遼平のにやけた表情に、自分が騙されているのに初めて気付いた。

「あーっ、また僕に嘘ついたー! 遼のバカーっ、僕は本気で悩んでるのにっ! 遼がモテないことのコンプレックスぐらい悩んでるのにー!！」

「……お前さ、さっきから悪気無く人を傷つけるのやめろよな？」

本当に、間違っではないないが。しかし事実こそ人を傷つけるものだ。

食べれるだけ食べていくらか朝食を残した遼平は、立ち上がって寝室に戻り、やがてラフな私服に着替えて出てくる。

「やっぱり出かけるんだ？　どうしたの、こんな日に」

「特に何でもねえよ。お前は今日、家にいるか？」

「ううん、炎在先生に呼ばれてるんだ。午前中だけね」

「……診察か？」

「あはは、それもあるけどあくまでオマケ。お使いを頼まれてるんだ。遼は気にしないで」

一瞬気にかけてた遼平に、牛乳を飲みながら純也が笑って答える。

「ふーん……」と受け流すような言葉を発しつつ、遼平は財布をポケットに突っ込んで時計を確認し、玄関へ向かおうとした。

「あ。そうだ純也、もし真から仕事の連絡来ても、俺は寝込んでるってことにしとけ」

「え、仮病使うの？　無理だよ、だって遼は病気になったことないじゃないか」

「そこをなんとかしとけっ。フグ食って食中毒おこしたとか、サソリ踏んで昏睡状態とか」

「……どこからツツこめばいいかわからないんだけど、とりあえずウチにはフグを食べる余裕も無いし、日本国内にサソリはいないよ？」

「な、なんか上手い言い訳作っとけよっ。頭いいんだろ？」

「遼の頭の良さ基準って、言い訳のレベル？」

なんだか空しくなって、食卓の上に吐息を零す。バカバカしいので言い訳は考えない。

「でもさ、そんなに大事な用なんだ？ 珍しいよね、何の用事？」

「別に。お前には関係ねえよ」

「……。そうだよね、いつてらっしやい」

遼平が誤魔化そうとしている用事を知りたかったのだが、プライベートに首を突っ込むのは無粋だと思い追及を止めた。少しでも感じる寂しさを押し込めて、笑顔で見送る。

男は出ていき、アパートの部屋に一人残る。自分の朝食を再び準備し始めながら、ふと視線がカレンダーで止まった。

「今夜はご馳走でも作ろうかなあ……折角クリスマス・イヴなんだし」

そんなものを我が家の同居人は喜ばないことをわかっていたが、それでも一人で呟いていた。たまには自分の為に、楽しみたい。クリスマスは子供の希望の日だ。

窓から望める空は、白に覆われていた。分厚い雲は北風に散らされることなく、朝陽さえ弱めさせて天を支配する。

白は今年も、少年に一抹の不安を抱かせた。

## 第一章『愛の探偵団』(1)

### 第一章『愛の探偵団』

クリスマスモード絶頂で賑わう繁華街。そんな色鮮やかな群衆の中でも、目立つ男女が一組。

「ねえ見て見てシンっち！ 星の装飾がキレイ〜！」

「ほんまにな〜！ でも、ワイの隣りで輝く星には到底敵わんで〜」  
「やった、もう、シンっちってば〜！」

上下の色を赤と白で揃えたペアルックの二人も、今日はいつもよりは周囲から浮いていないが。派手な赤いコートは、男の方は踵までであり、女の方は腰元まで。先端には白い綿毛。

『年末年始くらい少しは休ませろ』という部下達からの声と、愛妻とクリスマスを過ごしたい、という理由の特別休暇。ほとんど後者の理由で、部長は今日だけ休みに決めた。大体、若者などは年末年始も特にやることなど無いのだ。

そんなこんなで、真は友里依と共に手を繋いで若者の街へ。ショッピングが目的だが、要はただのバカップルデートだったりする。

「今日はクリスマス・イヴやな！ 大切な人と過ごす特別な日や」  
「素敵〜っ、今日ばかりは誰も私達を邪魔できないのねっ」

誰にも邪魔されたことなどないだろうに。

どんな厳冬だろうとぶっ飛ばすほどの熱愛を醸し出す二人に、部

下達は既に傍観の体勢に入っている。この夫婦を制止しようとするほど、精神が強く、時間をムダにしたい人間など存在しない。

「ユリリン、次ドコ行こか？」

「次はねー、お洋服が見たいなっ。二人でおそろいの服にしたいの！  
それと……あら？」

街並みを眺めながら楽しそうに喋っていた友里依が、不意に言葉を切る。それを不思議に思い、真が友里依の視線の先を追ってみる。

「あの駅前に立っとなの……希紗やないか。珍しいなア、あの希紗がこんなトコにいるなんて」

「希紗ちゃんだって女の子だもの、若い子の街にいたっておかしくないわ」

「せやけどあの希紗やで？ 休みなら絶対に家で機械いじっとると思うとったが……とりあえず声かけてみるか。おーい、希――」

「ちょっと待ってシンっち!!」

手を振りながら近づこうとする夫を、妻が物凄い力で引っ張る！  
あまりの不意で強い力に、真は地に腰をぶつけてしまった。ロングコートの中に隠れた木刀が、乾いた音をあげる。

「な、なんやのユリリン？」

「よく見てシンっち、あの希紗ちゃん表情は人待ち顔よ。きつと誰かと待ち合わせしてるんだわ」

そう言われてみれば、遠巻きに見える希紗はずっと右足でリズムを刻みながらしきりに駅の改札口に振り返っている。

「それにあの服……明らかに外着よ。いつもよりお化粧してるみたいだし……。あの様子だと、相手は男ね」

この寒い中、希紗の上着は両肩の肌を晒した、ミニスカートほどの丈がある白いTシャツ。更に可愛らしいブーツに届くか届かないかくらいの水色のスカート。髪型は、長髪を後頭部で束ね上げてピンで留めた、ベーシックアップスタイル。

「そんなこともわかるんか！ さすがマイハニー！」

「だってシンっちの妻ですものー！」

「「愛してるー！！」」

路上でいきなり愛の奇声を発した二人に、注目の視線が集まり、人々が遠ざかる。それに気付いた希紗が、ふとこちらに顔を向けてきたので、夫婦はすぐさま街路にあるいくつものクリスマスツリーの一つに隠れた。

「危なかったわ、さすが希紗ちゃん、私達の気配は隠しきれないわね……」

誰でも気付きます。

むしろ気付かない希紗は、今は何かに心奪われているようにも見える。何度も腕時計を確認して。

「……し、しかしやな、相手が男で外着っちゅーことはつまり……」

「「デート？」」

クリスマスツリーの裏に隠れながらお互い夫婦は人差し指を向け合って同じ言葉を発する。その互いの反応は、真は目を丸くし、友里依は好奇心で眼を輝かせる、といったものだった。

「そうよねそうよねっ、希紗ちゃんだっていい年頃だもの、クリスマスデートだっておかしくないわ！」

「でも……そうすると、希紗が待つとる男ってのは……まさか滯——」

天地がひっくり返ってもそんなことは有り得ない男の名を真が口にしようとした時、希紗の声が聞こえた。ビククリして、夫婦はそ——と誰かに手を振っている希紗を覗く。

「こっちこっちゅー！」

改札口から大勢の人が出てくる中、希紗へ歩み寄る人影があった。駅の屋根の影で顔がよく見えない……。

「もう、遅いわよー、かなり待ったんだから！」

「いいじゃねーかよ、こんな日ぐらい……希紗」

「遼平は時間にアバウトすぎ！　せつかくの休みなのに」

現れたのは、まだ眠そうに紺髪を掻き上げる、ラフな格好の遼平。



その会話を見ていた夫婦は、クリスマスツリーの両側から顔を出したまま、硬直。  
そして。

「「えええええええええええええええええー!?!」」

## 第一章『愛の探偵団』（2）

見事にハモった大絶叫に、街路を歩いていた人々全員が何事かと振り返る。遼平までこちらへ首を向けたので、真と友里依は音速でクリスマスツリー裏に隠れた。

「どしたの、遼平？」

「いや、今何か聞き覚えのある声が……」

「誰だったか……？」と首を捻る遼平を、不思議そうに見上げる希紗。だが、やがて遼平が「まあいっか」と受け流してくれた。

……一方、傍観者側のバカップルは。

「ちょっ、な、な、なんなのアレ！？ どーして遼平くんがココで出てくるの！」

「ワイだってわからんがなっ！ まさか……まさか、遼平だなんて！？」

「シンっちも知らない内に二人とも仲良くなって……？」

「そ、そういえば昨日事務所で、何か希紗が嬉しそうに遼平と喋ってたけど……」

その時は気にも留めなかった。てっきり、遼平をまた何か新しい発明の実験役にでもさせるのかと……。

「滯斗くんとは！？ 希紗ちゃんって滯斗くんのこと……」

「ワイも希紗は滯斗やと……」

「こ、コレって遼平くんの略奪愛！？」

「……いや、『略奪』も何もまだ滯斗とは上手くいってなかったよ

うな……」

昼のメロドラマ大好きな主婦、友里依は興奮気味。一方、真は最近の希紗の動向を思い出そうと必死だ。何か悪い物でも食べたのではないかと。

もう一度、目を擦りながら夫婦は駅前の男女二人を覗き見る。

遼平の服装は、いつも事務所で昼寝している時と同じカットソーのシャツに膝元が破れたジーパン、普段と違うのは革製のジャケットを着ていることぐらいか。

「遼平、また寝ぐせ直ってない」

「ああ？ いいだろ、こんぐらい……」

「気になる！ 一緒に歩いてて気になるわよ」

背伸びして男の寝ぐせを直そうとする希紗に、遼平はそう言いつつも腰を曲げてやや頭を下げてやる。希紗の細い指で梳かされ、いくらかマシになる遼平の紺髪。こうして見ていると……。

「……ねえシンっち、なんかあの二人、イイ感じじゃない？」

「なんだかワイら……いけない場面見てしもうた？ 見てないことにした方がエエかなア……」

クリスマスツリーの両側から顔を覗かせる不審夫婦は、自分たちが周囲の視線を集めていることも忘れ、事の成り行きを呆然と見ていた。だが。

「じゃ、行きましょっか」

「そうだな」

楽しそうな笑顔で遼平の腕を引いて、希紗達は歩いていってしま  
う。それに慌てた夫婦は。

「ど、どないするユリリン!?!」

「どうするって、もちろんコレは見逃せないわ! 中野区支部始ま  
って以来の一大事よ!」

「せやなっ、これはかなり気にな……やなくて、部長として現状確  
認せな!」

真、一部本音が漏れている。二人だけでスクラムを組み、気合を  
入れた。

「『愛の探偵団』、ここに結成!」

「おーっ!!」

こうして、『愛の探偵団』（友里依命名）によるおかしな追跡劇  
が今、始まる。



「よし、採血はこんなモンでいいだろう。結果報告はまた後日にな  
るが、まあ、異常は無いだろうな」

「ありがとう、先生」

注射針の痕に絆創膏を貼ってもらい、純也はまくっていた長袖を下ろす。

純也の血液を小さなボトルに詰め、獅子彦はその紅を見ながらふと呟いた。

「うーん、いつも思うんだが、お前の血って何か不思議なんだよな」

「え、何が？」

廃ビル地下、闇医者・炎在獅子彦<sup>えんざい ししひこ</sup>の裏病院の診察室。冷たい蛍光灯の光を反射させる白壁で、部屋は明るく見える。その中で、サンガラスを外した闇医者がじーっと純也の血を眺めながら答えた。

「まず、色がやたらと濃いんだよな。検査結果ではヘモグロビンの数も正常なのに」

「そんなに紅いかなあ？ 遼もこれくらいだけど」

「あいつは別格だ。蒼波一族の遺伝子は優性でな、一般人と交わってもその特性を色濃く残す。特に遼平は、先祖返り並みの濃い血脈らしいしな。蒼波一族の血液の色は、特別なんだ」

「そう言われてみれば、真君達とはちょっと色が違う……かも？」

中野区支部の治療員担当である純也は、真や滯斗、一般人の血液を思い出そうとしてみる。何せ一番怪我してくるのが遼平なので、今まで比較したことなどなかった。

遼平は一族の血脈のせい。ならば、純也は……？

「そしてお前の血液中の細胞……細菌を殺す白血球と止血させる血小板の数が異常に多い。生物としては理想的だ。病が自然治癒しやすく、傷口もすぐにふさがる。まるで————」

医学者としての見解を淡々と述べていた獅子彦だったが、そこではっと口を噤む。自分の言葉を真剣に聴いている少年の真摯な瞳に、気付いてしまったから。

「ま、まあその……アレだ」とお茶を濁すような言葉に切り替え、サングラスをかけなおす。採血した血は机の端に追いやり、回転イスで純也に向き直って。

「……悪かった。俺のただの憶測に過ぎない、忘れてくれ」

少年の瞳に宿る『その先を教えてほしい』という懇願を読み心術で《読んで》しまってから、獅子彦は後悔の念に駆られていた。

今はまだ、言うべきではない。

## 第一章『愛の探偵団』(3)

「それより、ちゃんと薬は飲んでいるか？ 後遺症や発作は？」

「薬は必ず飲んでるよ。最近は全然発作も起こらないし、後遺症は……」

「……後遺症は？」

言葉を切ってしまった少年に、闇医者は眼を細める。追及などしたくないのに。

「冬……だからさ、外に出れば何か記憶が戻るかもって思ったんだけど……消えていくんだ」

「消える？」

両膝に握り拳を置いて、俯いたまま純也の声は震える。だが言葉を返すべく、悲愴な瞳を上げた。

「……うん。思い出すどころか、どんどん記憶が曖昧になっていくんだ。そう、遼と出会った時の記憶だけが、消えてく……」

まるで壊れた映像ディスクのようだと、純也は言う。時間が交錯し、場面場面だけしか浮かばず、声が聞こえない。遼平と出会った頃の記憶だけが抜け落ちていくようで、まるで誰かが意図的に消そうとしているようだ、と。

「……………」

獅子彦は腕を組み、サングラスの奥で瞳を閉じる。……もう、こ

れ以上見ていられなかった。

少年の瞳に映る、孤独と哀愁に。

《読めて》しまう。相手の瞳を見るだけで心が読める特殊能力、『読心術』で。通じてしまうのだ、少年の寂しさも、悲しさも、恐怖も、全て。

「忘れちゃうのかな……遼との記憶まで、消えちゃうのかな……僕は、また……！」

《無》という、救われようのない恐怖。彼にとって死よりも恐ろしい、大切な《何か》が消えていく……残酷すぎる病。

だが、今の獅子彦は真実を言えない。獅子彦が、言うべきではない。それが彼らのためなのだと、闇医者は思いたい――。

僅かな、気まずい沈黙。それを破ったのは、意外にも少年の方だった。

「……あ、そうだ先生、頼まれてたお使い、行ってきたよ」

先ほどの暗さを誤魔化す笑顔になって、足下に置いていたリュックサックから紙袋を取り出す純也。獅子彦も、その空気に乗ることにした。



「おお、ありがとうな純也！ 俺の病院は年中無休だから、長く病院を留守に出来なくてな。本当なら俺がこの目で選びたいんだが……」

「先生って、コレにはこだわるんだよねー」

至極嬉しそうに紙袋を受け取り、中身を机の上に出して確認し始める獅子彦。まるで子供のように嬉々として喜ぶ、その手には。

「これこれ、やっぱり綿毛は百パーセント天然に限るよな！ 布地はチェック柄と無地の両方が欲しかったし、フェルトとボタンの色は最低でも十色は揃えておなくては！ うん、やっぱり純也には見る眼があるっ！」

この真つ白な診察室に似合わない、色鮮やかな布や毛糸、ボタンが広がる。そう、秀才外科医にして天性のカウンセラー、闇医者・炎在獅子彦唯一の趣味は、《手芸》。

「……先生ってコレだけにはこだわるよねー……」

もはや苦笑を隠せない純也の前で、獅子彦は布地の肌触りまでチェックしている。そしてそれに満足すると。

「じゃ、今度お前らが怪我してきた時は何割か免除してやるからな」「あはは、ありがと、先生」

純也と獅子彦の間でこんなやりとりが交わされているのを、遼平は全く知らない。一見すると獅子彦がセコいように思えるが、獅子彦の言う『何割』というのは数十万から数百万のレベルだ。手芸用品代と手間賃を考えても、明らかに純也の方が得していることになる。

まあ、あのしょっちゅう大怪我してくる同居人のための、保険の  
ようなモノ。

「じゃあ先生、僕は今日の買い物もあるからこれで……」

「あ、ちよっと待て純也」

「なに？」

軽くなったリュックを背負って出て行こうとする純也に、獅子彦  
は引き留めの言葉をかけてから机に向き直り、一番下の大きな引き  
出しから何かを取り出す。

「今日はまだイヴだけだな、メリークリスマス、純也。俺からのプ  
レゼントだ」

彼が手渡したのは、二つの人形。二等身で、人を模したぬいぐる  
み。

「わーっ、これって僕と遼！？　かわいいー！」

丁寧にも銀糸を縫い込んだ方が、純也。目つきが悪い方が、遼平。  
愛おしそうに純也は人形を抱きしめる。

「いやー、俺も最近は退屈だな。なんか縫ってないと落ち着かない  
から、とりあえずお前らを作ってみた」

「……先生、人、縫いたいんだね……」

「やっぱり常に皮膚を縫っていたいと思うのが外科医の心理だろ？」

「それは先生だけ」

よくよく観察すると、この人形、ほとんど縫い目が見えない。獅

子彦は、どうやらぬいぐるみを縫うのに手術用糸を使ったようだ。

「ふふふ、俺がお前らの手術をするように丹誠込めて一針一針縫った力作だからな……大事にしろよ？」

「……なんだか怖くなってきたんだケド」

廃ビルの暗い地下で、大の三十代男（闇医者）が想いを込めて縫った人形………いろんな意味で怖い。

丁寧に人形をリュックサックに詰め、水色のマフラーを巻いて純也は今度こそ別れを述べる。

「今度の冬はやたらと寒いからな、風邪とかひくなよ？」

「平気。……今年は雪……降るのかな」

ふと少年が漏らした、不安の言葉。震えを抑えているような手と、遠くを見る瞳。去年、雪は降っていないが、この寒さならおそらく今年も。

「ああ、降るかもな。だが……雪を恐れるな、お前はもう大丈夫だから」

白衣のポケットに片手を突っ込みながら、獅子彦は立ち上がって小さな少年の頭を撫でる。その行為に、小動物のように喜んで純也は「うん」と頷く。

どこまでも子供のように幼く、そして他人の気遣いに気付ける聡明な少年。だから彼は、純粋な笑顔で診察室を出て行った。

「……俺は無神論者なんだがな、」

患者のいなくなった診察室では（医者だけが）煙草を吸える。そんな彼だけの特別ルールを守り、くわえた煙草にライターを近づけながら。

「カミサマよ、あんたはあの子にどんな運命を背負わせたんだ？あの子に、何の罪があると言うんだ？」

神から授かったその《眼》ですら、仰いだ天井には消えていく紫煙しか映らなかった。

## 第一章『愛の探偵団』（4）



「コレを」

「……はいよ」

薄暗く埃かぶった狭い店内で、男がカウンターに銃弾のパックを置く。それをちらっと一瞬だけ見て、老店主は手元の新聞に視線を戻した。

代金など今更言われなくても充分知っている。男は細い指で財布から札束を抜き、銃弾パックの横に置いた。

「随分とご無沙汰だったじゃないかい。仕事が来なくなったかい？  
消去執行人」

「……言っただはずだ、俺はその名は捨てたと」

「おや、そうだったかねえ」と興味無さ気に札束を数え、常連客を虚ろな眼で見上げる。相変わらず淡緑色の前髪が目元を隠しているが、その奥の瞳には、確かに《色》があった。

「旦那ほどの人間が……人殺しが怖くなったかい？」

男は購入した弾丸を早速自分のリボルバー式拳銃に装填し、黙って出て行こうと店の扉へ歩んでいく。その沈黙は肯定の意なのかと、老人は思ったが。

「勘違いをするな。俺は《守護者》……それだけのこと」

漆黒のロングコートをまとったその姿は、あの瞬殺の悪魔と同じなのに。

明らかに彼の瞳には、感情の《色》、その光が戻っていた。この店に初めて訪れた時の心無き青年ではなく。

軋んだ音を立てて、扉は閉まっていく。それを眺める老店主の顔は、シワまみれで奇妙に歪んで。

「……またのご来店を、紫牙の旦那」



裏路地から一步踏み出せば、そこは虹色の光溢れる賑やかな繁華街。裏と表がどこまでも遠く、あまりに近い、今の東京の実態。

クリスマススムードなど滯斗が気に留めるはずもなく、ただストックの少なくなった銃弾を買いに來ただけなので、ウールのロングコートを整えて人並みを無表情で通過していく。今は仕事ではないので裸眼のままだが、それでも照準グラスを持ち歩いている。

ただ彼が歩いている、それだけなのに周囲の女性から振り向かれ、視線を注がれる様は、やはり滯斗の美貌と空気が成せるワザなのか。本人はちらちらと見られて不愉快極まりないのだが。

「あれは……」

元・暗殺屋だから気付いてしまう、《気配を消している者の気配》。しかもよく見知ったバカップ……いや、上司とその妻だ。何をしているのか、まさに馬鹿らしく二人で蛍光看板に隠れている。

(……見なかったことにしよう)と滯斗は即決。あの、いかにも『厄介な事に首突っ込んでます』オーラに関わりたくない、と回れ右で百八十度回転。

足早に遠ざかろうとした、そんな時だった。

「あっ、滯斗くーん！」

見つかってしまった。

(聞こえなかったことにしよう)と、即判断。思いっきり地を足で蹴って逃走——！

出来なかった。

「「ふーふふーふふー！」」

不気味な笑い(?) 声のハーモニーと一步も動けない状態に振り返ると、両腕をそれぞれ真と友里依が掴んで黒い笑顔を向けてきているではないか。

「いいところに来てくれたわ滯斗くーん……」

「……離せ、友里依、真」

「逃がさへんでえ、今日だけはなア……」

「……貴様らから逃げられたことなど一度も無いがな」

どうやらこの状況は、挨拶だけでは済まされないらしい。明らかにこの夫婦は滯斗を何事かに巻き込もうとしている。

「とりあえず話を聞いてよ滯斗くん！ 中野区支部の一大事なのっ！」

「何だと？」

そこでやっと向き直り、滯斗の瞳が《裏》のそれになる。悲しきかな、馬鹿がつくほど生真面目な彼。

「とにかく、アレを見て！」

アクセサリの多くついた友里依の腕……その指先が示すのは、一組の男女。

「希紗と……蒼波だと？」

「そうっ、そうなのよ滯斗くん！ どうする!？」

「……何を？」

「よく見てみい滯斗！ アレってまず間違いなくデートやで？ 希紗と遼平がデートしとんのやで!？」

「……だから??」

「「あーもーっっ!」」

本気で怪訝そうに首を捻る滯斗に、夫婦はこれ以上無いもどかしさを覚える。二人揃って地団駄を踏んで、滯斗を絞め殺すような勢



いでロングコートを握り締めた。

周囲の一般人の視線が余計集まってくるので早くこの状況から逃げ出したい澪斗を背にし、夫婦は囁き合う。

「ねえシンっち、澪斗くんまだ希紗ちゃんの想いに気付いてないのっ?」

「ダメなんよ、ほんまに恋愛には超鈍感なヤツで……」

「希紗ちゃん、想いが届かないことに自棄になって遼平くんなんかに手を出したのかしら……」

「せめて純也に行ってほしかったなァ……」

「……おい、これだけならば俺は帰るぞ」

「「帰るなァァ!」」

夫が澪斗の首もとに木刀を構え、それを回避するために後ずさった脚へ妻が抱きつく! 真の戦友である澪斗さえ逃れられない、愛の連携コンボ。

「このままじゃあまりに希紗ちゃんが不憫じゃないっ、相手があのだよ!」

「あんたのせいでもあるんやで澪斗! 遼平は獣やで!」

「はあ?」

遼平、あまりの言われ様である。

「へくしっ」

「やだ、遼平風邪ひいたの？」

「いや、なんか違うと思うんだが……」

背後で散々な展開が繰り広げられているなど露知らず、遼平と希紗は歩いていく。抵抗の声をあげようともがく滯斗を押さえつけ、真と友里依は追跡を再開した。

「愛の探偵団、新たな仲間を加え、出発よ！」

「行くで滯斗！」

「……何故俺が……」

男の空しい呟きが、聞こえたとか聞こえなかったとか。

## 第二章『愛戦争、勃発』（1）

### 第二章『愛戦争、勃発』

容赦ない北風に、純也は思わず首を縮める。マフラーに顔をうずめて、真っ白な息を吐いて。

「ふざけてんのかテメェ！ 何か言えよ！」

ふと街中で聞こえてきた、荒々しい声。そちらに顔を向ければ、パチンコ屋の前で白昼堂々、強面の男達が誰かを取り囲んでいた。人も少なく、治安の悪いこの辺りではよくある光景なのかもしれない。表社会でも。通りかかる人々も巻き込まれないように知らぬフリで足早に遠ざかっていく。

「え、ごごっ、ごめんなさいっ、すみません！ 許してください……」

「お前、この人が誰だかわかってんのかぁ！？ この人はなあ、ここいらでは有名な……」

「……有名な、誰なのかな？」

不意に聞こえた子供の声と、直後の男の野太い悲鳴。

何事かと若者達は振り返って、自分達のリーダー格であるその有名な人をアスファルトにねじ伏せている白銀の髪の少年に驚愕した。

「なっ、ガキっ？ お前——」

「ごめんなさい、いきなり失礼なことして。大丈夫、どこにも怪我させませんから。……ココから一刻も早く立ち去ってくれれば、ですけど」

男の巨体を片腕一本で地に押しつけている小さな少年に、誰もが畏怖を覚える。そっと優しく少年が男から手を離すと、即座に若者達は逃げ出していった。

「ぼっ、化け物だあっ！！」

「『化け物』、ね……」

白い息と共に小さく漏れた自嘲は、誰が聞き取れただろう。俯いた少年は、悲しそうに少しだけ微笑んでいた。

「純、ちゃん……？」

聞き覚えのある、若者の声。それに我に返って顔を上げると、先ほどまで若者にかままれていた人物が土下座したポーズそのままこちらを見ていた。ウェーブのかかった赤毛に朱色の瞳を持つ彼が。

「あ……リンリン！ ごめん、気付かなくて……大丈夫？」

「うん、助けてくれてありがとう！ 俺、もう怖くて怖くて……」

純也に『リンリン』と呼ばれているこの男、名を『林李淵<sup>りんりえん</sup>』という（自称）泥棒である。一応は裏の人間だが、どうしようもなく小心者なのだ。

「こんな所で、どうしたの？　どうしてあんなことに？」

立ち上がった李淵は、サンタクロースの服に帽子までかぶっている。足下には大きなバスケット。

「俺、今は街中でカイロ配りのアルバイトしてるんだ。ほら、コレ」

バスケットから取り出した小さなカイロは、裏面にカラオケ屋の宣伝が印刷されたものだった。冬場などによくある、ポケットティッシュならぬカイロ配りだ。

「あの人達にも配ろうとして近づいたら、いきなり睨まれちゃって……それでビビってうっかりカイロを投げつけちゃってね……」

サンタのコスプレをした男が近づいてきた途端にカイロを投げつけてきたら、それは怒るだろう。「本当に怖かったよおっ」と涙ぐむ男に、純也は少し苦笑しながらも「もう大丈夫だよ」と手を握る。

「このカイロ、全部配るの？」

「う、うん。じゃないと今日は帰れないんだ」

こんな寒空の下、細い身体を震えさせて、この二百近そうな数のカイロを配ってまわるのだろうか。その労働意欲に、純也は涙ぐましくさえる。

「なんか、現代版『マッチ売りの少女』……みたいだね」

「え、それ何かの話？」

「うん、童話でさ、健気な女の子が必死に冬の夜にマッチを売ろう

として、それで……」

「最後はどうなるの？」

ワクワクした希望の眼差しで先を促す李淵。確か、純也の読んだ絵本では。

「……女の子、凍死しちゃうんだよね……」

……………。

「純ちゃああああんっつ！」

「ああっ、ごめんリンリン、ただのお話だから！ 泣かないでっ、ほら、泣かないで！ 僕も手伝うからっ」

号泣して純也の身体に抱きつく李淵を、純也が必死に励ます。その痩せ細った身体を見て、純也は内心で（本当に凍死しちゃいそうだな……）とか思っていたが。

「俺死んじやうのかなっ……誰にも知られずに、冷たいアスファルトの上で静かに息を引き取るのかなあっ？ 嗚呼、それできつと、春には俺の死んだ場所にヒマワリが咲くんだ……アスファルトに咲く花のように、俺の骨は道行く人に何度も踏まれながら涙の数だけ強くなって……ううっ、ママー……」

「……リンリン、最近栄養の有る物食べてないの？ 落ち着いて、とりあえず春にヒマワリ咲かないから」

頭に栄養が回っていないと思われる被害妄想錯乱思考に、純也はカウンセリングを施そうとする。精神科系統は苦手なのだが。

十分後。

「どう、落ち着いてきた？」

「うん、俺はまだ生きてていいんだね……」

無尽蔵な李淵の涙に、大苦戦した純也。そして、ある提案をする。

「こんな所で配ろうとするから、あんな風な表のガラの悪い人にか  
られちゃうんだよ。もっと、明るい駅前とかに行こう？ 僕も一  
緒に配るの手伝うからさ」

裏社会の人間なのに表社会の不良に土下座しているようでは、や  
っぱり不安だ。純也がバスケットを持ち上げて、「ほらっ」と李淵  
に手を差し伸べる。

「俺、純ちゃんの優しさは一生忘れないからねっ、友達だもんね！」

「『友達』、か……ありがとう、リンリン」

何故か李淵に礼を述べた純也の笑顔は、どこか悲しげだった。

## 第二章『愛戦争、勃発』（2）



「俺からでいいのか？」

「うん、だって今日は私が誘ったんだし。先に遼平から」

だいぶ混雑した人混みの中、二人の会話を一言も聞き漏らすまいと耳をそばだてる奇妙な追跡者達がいる。

「『遼平くんから』って、何のことかしら？」

「何か目的があるようなやな……ユリリン、何やと思う？」

「まだ何とも言えないけど、もしかしたら……」

「いや、でもまさか……」と何かに戸惑う友里依を、真が不思議そうに振り返る。彼の左手には、隙あらば逃げようとする滯斗の両腕ごと胴体を縛り上げている縄。

「貴様ら……俺にこんなことをして、タダで済むと思うなよ……大体、何故休日俺がこんな……こんな……」

小さく震えながらブツブツ呪いの言葉を呟いている滯斗なんかお構いなしで、夫婦は遼平と希紗を見失わないように一定の距離を保って追い続ける。

「すごい数の人混みよね、遼平、大丈夫？」

「一応耳栓してはいるがな……やっぱり人間が多い所はうるさくて



敵わねえ」

「人多すぎて迷子になりそうだしね」

「ガキじゃあるまいし、その歳で迷子になるなよ？ ……こっちはいい」

そう言って不意に腕を伸ばした遼平は、希紗の手を握る。雑踏に揉まれながら、二人の距離はぐっと近くなる。

「え、遼平っ？」

「こうすりゃはぐれねえだろ？」

軽いふざけたにやけ顔で、悪戯っぽく遼平は笑っていた。

「「あああああああっ!?!」」

バカップルの叫びも、さすがにココでは掻き消されていく。クリスマスの音楽が大音量で流れるこの雑踏の中では。

「み、見たっ、シンっち!?!」

「バッチリ見たがなっ、ユリリン!」

飛び跳ねて興奮している二人から、なるべく無関係の他人に見えるように漑斗は一步退く。

「漑斗っ、見たか!?! 遼平が希紗の手をつっ」

「……見たが、それがどうかしたのか？」

「『手を繋ぐ』っていうのはね、恋人関係の第一段階なのよ!?!」

「……逢引なら、おかしくないのではないか？」

「あんた、ちっとでも心が痛まんのかァ!？」

「だから、何故俺なんだ?？」

ここまで言われてもわからないのか。己への好意など一ミクロンほども感じとれない漣斗は、『鈍感』を過ぎてはや『悪人』である。

「シンっち、阿修羅貸して……一度斬り殺して漣斗くんの目を覚まさせてやるわ……!」

「ちよっ、ユリリンあかんって! 阿修羅はもう人を殺さんと誓っ――」

「乙女心がわからない鈍感野郎は『人』の資格無しよーっ!」

「ユリリンっ、人格変わっとなるっ、キャラ変わっとなるって! こんなトコで阿修羅抜刀せんというてー!」

夫の腰から木刀を抜き、更に抜刀しようとしている妻。漣斗は、真の腕から繋がっている縄の束縛のせいで逃げられない。

「友里依、ま、待て、俺が何をしたというんだ!？」

「何もしないのがいけないのよーっ!」

「何故だー!？」

腕ごと腹部を縛り上げられている漣斗は、銃を手にもすることもない。そんな彼の上半身を蹴り倒し、友里依は仰向けになった漣斗の顔横数センチ地面に、黒刀を突き刺して。

「最後まで見届けるわよね、漣斗くん?」

超極上の笑顔で言い放った。刃を顔へ向けたまま。

「……………あ、ああ……………」

澪斗、敗北。

その返事に満足したのか、友里依は何事も無かったかのように阿修羅を鞘に戻し、夫に返す。真は引きつった笑みでそれを受け取り、澪斗を縛っていた縄を解いた。「……………今度ユリリンが抜刀したら、本気で逃げてや」と囁いて。

運良くまだ遼平達はゆっくり歩いているだけで、見失っていないかった。また、彼らの会話に神経を研ぎ澄ます。

「なあ希紗、どんなモノがいいんだ？」

「私はカワイイ物がいいな。でも、もう子供っぽい物じゃなくて、ちよっと大人びた物がいいかな」

「よくわかんねえよ。店も多いし……………お前が適当に選んでくれ」

まだ二人は手を繋いだまま、ゆっくり街路を歩きながら道ばたの店を見てまわる。そこで、周りの店とは少し雰囲気の違い道角の店を希紗が指差す。西洋風の、少し洒落た店だ。

「『メロディー・ギャラリー』？　なんだよ、ココ」

「遼平から贈るんだったら、コレが一番よ！　私、ココがいいな」

希紗は自信を持った笑みで、その店へと遼平をつれていく。丁度店内はガラス張りで、中の様子が観察できた。

「や、やっぱり……！」

「ユリリン？　どないしたん？」

「シンっち、コレは………クリスマスプレゼントの贈り合いよ！」

「プレゼントの贈り合いやて！？」

「これは絶対そうよ！　イヴの日にデートして、お互いでプレゼントを選び、夜に交換する！　クリスマスデートの王道よ！」

「そこまで発展してたんか……」

いつの間にそこまで恋仲を発展させたのであろうか。同じ死線を潜り抜けてきた仲間には特殊な感情を抱く、と言われているが……。

「ところであの店……何を売ってるのかしら？」

「……看板に、『オルゴール専門店』と書いてあるぞ」

今まで沈黙を守っていた滯斗が、初めて自ら口を開いた。彼が指差した店の前の立て看板には、確かに『オルゴール専門店　メロデイー・ギャラリー』の文字。

「なるほど……遼平やから音には敏感やろうし。希紗の言うことも合っとるな」

店の横のガラスから顔を覗き込み、店内の会話を聞き取ろうとし

てみると。

「充電するタイプから電池式……まだネジ巻き式のものもあるのね」

色とりどりのオルゴールが並ぶ棚を、希紗が物珍しそうに見る。

遼平はそんなに興味深そうに見たりはしなかったが。

「オルゴールなら、ネジ巻き式でいいだろ」

「え、でもこのタイプが一番値段が高いわよ？」

「値段なんか気にしねーよ」

遼平宅の家計は居候共々大食いなせいで大抵は火の車状態。そんな彼の意外な発言に、「「なにいい!？」」と声を押し殺してガラスにへばりつく不審夫婦。

「コレなんて良くない？ この白いの」

大きめのコンパクトのような、純白のオルゴール。ネジを巻いて開くと、甘い音楽が流れ出し、天使の細工が踊る。

「曲名は何かしら？」

「値札に書いてあるぜ。えっと……『愛しい君へ』？」

「へえー、ロマンチックー」

「……けど、コレは却下だな。俺に合わねえし……白いし」

「えー、なんでよおー」

希紗の手のひらの上にあったオルゴールを遼平は棚に返し、他の物色し始める。そしてふと、青い箱形のオルゴールを手にした。

しばらくじーつと見てから、ネジを巻いてみる。箱を開いてみると音楽が鳴り出し、鏡に星が流れる様が映った。

「あ、コレもキレイ！ 曲名は……『ずっと傍にいるから』、だって」

青というよりは爽やかな蒼に近く、もの悲しい旋律を流すオルゴール。それを遼平は黙ったまま一曲分聴いて、そっと優しく閉じた。

「……コレにする」

「え、他のも見なくていいの？」

大きな手で大事そうにオルゴールを包み、遼平はレジへ向かいながら口元を引き上げる。

「だってコレが一番、俺達らしいだろ？」

まるで蒼波の唄を歌っている時のような、優しげな笑みだった。

「あの遼平くんが……！」

「あんな風に笑いおった……！」

店のガラス窓に両手を押しつけた夫婦は、それだけ口にした後、

絶句する。店内では、精算してプレゼント用に包装されるオルゴールを眺めている遼平。そんな彼を微笑ましく見上げている希紗。

「滯斗くんも見てよっ、あの遼平くんの優しそうな表情！」

「……見えている」

「どう思う！？」

「……………気色悪いな」

「「そっちかよ！！」」

さすが、関西人の夫を持つ夫婦。ツツコミが見事に揃う。そんな賑やかな彼らに気付いた、長身の男がいた。

「ハ〜イ、ロスキーパーの皆サン、こんな所で会うナンテ奇遇だね」

「貴様は……！」

純白の神父服をまとった二メートル近い長身の白人は、人混みの中でもよく目立つ。銀色の十字架をネックレスのように下げ、片腕に茶色い紙袋を抱いていた、彼は。

## 第二章『愛戦争、勃発』（3）

すぐさま拳銃を腰から抜いた漣斗に、外人はおどけたように軽く両手を上げて手を振る。

「オーウ、街中で物騒なモノを出しちゃダメだよ、漣斗くん。大体、今のボクは情報屋じゃナイしネ」

裏社会の情報屋『ハイテンション』の、フェイズ・B・イゼラード。能天気でもどんな時でもバイオリズム最高潮な騒がしい人物だが、漣斗が敵視するのには理由がある。

「貴様、以前はよくも……！」

真の情報を怨恨者に売り、友里依の命さえ危うくさせた。真もろとも中野区支部を罠にはめようとした人間に、間接的とはいえ協力した人物なのだ。

「もう、漣斗くんは融通がきかないネー。ボクは情報屋なんだカラ、情報を買ッテくれる人がいれば売るのは当たり前だよ？」

「ならば何故、純也にまで手を出した！」

フェイズ曰く『アフターサービス』とやらで、襲われた純也。漣斗は、それをしっかり覚えていたらしい。

「……もうエエよ、漣斗」

優しい苦笑で首を横に振る真が、漣斗の銃を下げさせる。一番被害に遭ったはずの、真が。



「情報屋の仕事なんて、そんなモンや。裏社会では仕事を選ぶ余裕なんて無い。ワイも、もう恨んだりしてへんし。大人げないこと言うなや」

「真、しかし……」

まだ納得しきれない滯斗に、「ありがとな、でも、」と軽く口元を引き上げたと思っただけ。

「コイツ、無謀にもあの純也を怒らせて《ボッコボコのギッタギタにやられた》挙げ句、遼平に《お情けで》逃がしてもらったお人や。これ以上責めんのは、可哀相やろ？」

「真………笑顔がとてつもなく眩しいのだが」

虹がかかるような満面の笑みでフェイズを指差す真に、確かに同情の念を覚える。ここまで散々に言われている情報屋に。

「シンっちってばとっても寛大〜！ 素敵！」

「いやいや、人として当然のことを言っただけで〜」

「……部長サン、一番大人げないヨ……」

真の痛恨の一撃が効いたのか、テンションが下がるフェイズ。この部長が執念深いタイプだと、ちゃんと調べておいたのに。

「まあ、今日ぐらいいはそんな事水に流そうや。で、あんさんは何しとるん？」

「ボクはもちろん、今夜のクリスマスイベントの準備ダヨ。ボクの教会で、イヴのイベントがあるのサ」

情報屋フェイズは、東京表社会で小さな教会の神父をしている。たった一人の神父だから、準備が忙しいのだろう。抱えている紙袋には多くの買い物が詰められていた。

「部長サン達は何してるのカナ？ お仕事……じゃなさそうダヨネ」

「あー……あんさんは知らない方がエエかも——」

「シンっち！ 二人が店を出ちゃうわよっ！」

「二人？」

希紗にぞっこん惚れ込んでいるフェイズがこの状況を見たら——  
——そんな不安がよぎり、真はなんとか誤魔化そうとしたのだが、友里依が声をあげてしまった。

友里依が指差した方向へ思わず視線を向けたフェイズは、見てしまふ。人混みの中をはぐれないようにくつついて歩く、遼平と希紗を。

「ワッツ！？ オーマイガッ、ボクの愛シの希紗チャンがー！！」

買い物袋を落とし、目を見張る白人。彼は、その場面だけで全てを察したようだった。

「あのデーモン遼平クンと……そんなっ、マサカー！？ ……………  
っさつダヨ……」

「え……フェイズはん？」

「抹殺ダヨ……あのふざけたにやけ顔と胴体をバイバイさせてやる  
ヨー！！」

叫びながら、どこからともなく二メートル近い白棒を刹那に構え、思いつき振りかぶる。棒の先端には、弧を描いた大きな鎌の刃。

「ちよっ、待てやあんさん！ こないな街中で物騒なモノ出すなゆーてたやろっ！」

「ノープロブレムッ、聖女を毒牙にかけようとするデーモンはどこであろうと抹・殺！！ オールオーケー！！」

「ここは日本なのよっ、街中で刃物出したら通報されるわー！」

「愛の制裁に国境は関係無いネ！ 我らが父、神に代わってボクが地獄へ堕とシテやるヨっ、デーモンがー！！」

「……蒼波が『デーモン』なのは貴様の中で前提事項なのか……」

ため息を吐きながらも、滯斗も夫婦と一緒にあってフェイズの巨体を抑える。白い大鎌が目立ってしまい、周りがざわめき始めた。

「……！」

「遼平？ どうしたの？」

急に瞳の色が鋭くなった男を、希紗が不思議そうに見上げる。いきなり、遼平は強く希紗の手を握った。

「……なんでもねえ、次のトコ行くぞ」

そう言いながらも、遼平の足は速まる。強引に歩かされる希紗が、首を捻りながらもついていく。

（殺気……？ まさかな……）

男の漆黒の瞳が、陰しい色を映す。

「はア、はア、はア……。お、落ち着いたか？」

「ま、まあ、ボクもいきなりは襲ったりしないヨ。コレには何か、深あゝい事情があるに違いないしネ！ そうダヨ、あの希紗チャンが、ボク以外の男と歩くなんて……。歩くなんて……」

いきなり街中で大鎌を振り上げた自分の行為を無かったことにしておいて、三人がかりで取り押さえられたフェイズは凶器を隠す。本当にこの人物、仮にも神父なのであろうか。

「あつ、なんか遼平くん達、速く移動しちゃってる！ シンっち、追わなきゃ！」

「ヨッシっ、ボクも追っかけるヨ！ もし希紗チャンの柔肌にデーモンが触ったりしたら――」

「……情報屋、既に蒼波は希紗の手を握っているが？」

「ノオオオオオー！！ やっぱりココで虐殺スベシ！！」

……この後、またもや三人がかりでフェイズと大鎌《マリア》が押さえつけられたのは、言うまでもない。

## 第二章『愛戦争、勃発』（4）



「よろしくお願いしまーす、お願いしまーす」

大きなクリスマスツリーのオブジェがある明るい駅前で、カイロを配る少年の姿があった。

少年の持ち前の純粹な笑顔に、道行く人が快くカイロを受け取ってくれる。一方、サンタの格好をした男の方は、声が小さくてなかなかカイロが減らない。

「リンリン、残ってる分、僕に分けて？ この調子ならあとちよつとで終わるよ！」

「ごめん純ちゃん、俺の仕事なのに、俺は全然配れなくて……。俺……俺やっぱりダメな奴で……。ううっ」

また涙腺が緩みだした李淵に、「あ、あ、泣かないで！？」 大丈夫だよリンリン！」と必死にフォローしようとする小さな少年、純也。何とか彼が泣かないようにと、フォローを考えてみるのだが。

「リンリンは……ほらっ、表じゃこんなコトしてるけど、裏では立派な泥棒じゃん！ ねっ？」

「泥棒は全然立派な職業じゃないよ……。それに俺、ロクな物盗んだことないし……」

「ちなみに、今まで盗んだ物で一番高いのは？」

「大漁旗」

……………何故。

「……何をどう血迷って『大漁旗』なんて盗むに至ったの?」

「いや、一部のマニアの人には高値で売れて、管理もずさんで盗みやすく……でも……」

「でも?」

「盗んだままじゃ申し訳ないから、毎月少しずつその漁師さんの家に匿名で仕送りしてマス」

「返って損してない?」

涙をこぼしながら頷く男に、「リンリンってある意味義賊?」と呟きながら背中をさすってやる。自分が食べていくのにさえ必死でアルバイトで身を粉にしているのに、更に見知らぬ他人に仕送りまで……本当に、何故この人物は泥棒なんてしているのだろうか?

「えーっと……あ、ほらっ、リンリンには『手品』の特技があるじゃない! リンリンの手品はスゴイよ!」?

「そりゃ……俺の家系は全員マジシャンだからだよ……」

「そうだったの!」?

知られざる、林李淵の（比較的どうでもいい）過去! 敵前で目くらましに逃げる手段として使う、器用な手品は家系のおかげだったのか。

ふと李淵は余ったカイロをバスケットから一つ取り出すと、純也の両手に握らせる。それに首を傾げている純也の両手を優しく手のひらで包み、少年の手を開かせると、カイロは消え、一羽の小さなハトが両手から飛び立っていった。

「ええっ!? リンリンっ、今のどうやって……」

「……コレが俺の精一杯だよ。俺の家系は全員有名なマジシャンだけど、俺だけ家の中で落ちこぼれだった。不器用で、人前では上がり性で、俺だけ手品師には向いてなかった」

「だって……だって今の手品スゴイじゃんか! 不器用なんかじゃないよっ」

「ありがとう、純ちゃん。でもね、俺の家族はこんな小手先の手品なんかしないんだ。情けなかったよ、俺……弟が一ヶ月で習得したマジックも、俺は一年もかけてさ。だから、俺はあの家を出たんだ……自分の無能さに、俺は逃げたんだよ」

今までとは違う、静かに流れ落ちていく雫。それでも、無理に男は笑顔を作っていた。

「ごめんね、こんなどうでもいい話。どうしてだろ、情けない話なのに、純ちゃんには言えちゃうんだよね。友達だから、かな……」

「……リンリン、あのね、僕は――――」

人の心の痛みがわかる、共に感じることでできる優しさを持つ少年は、何かを告白しようとしていた。今までずっと、隠してきたコトを。

「……………すまないが、カイロをもらえるかい?」

穏やかなアルトの声に、二人は我に返る。そうだ、まだカイロ配りの途中だったのをすっかり忘れていた。

「あ、ごめんなさい、どうぞ！」

爽やかな笑顔で振り返り、純也がカイロを手渡した人物は――  
――漆黒。

「え……」

「おや……」

同時にお互いに気付いた途端、純也は氷水をかぶった気分になる。

深いフードまでかぶり、ローブのような漆黒のロングコートをまとった人物は。

「るっ、ルイン――！？」

見紛うはずもなく、あの最凶最悪の破壊屋だった。

「おや君は確か……」

挨拶のつもりなのか、深いフードをぬぐいさって長い金髪を外気にさらす。整った顔つき、宝石と称されそうな銀色の瞳、天河の如き鮮麗な金糸。美しすぎて、性別がわからない……否、性など越えた領域の美貌。

小さな少年を見下ろし、思い出そうとしているように眼を細めて微笑を浮かべる。女神のような表情で。



「ああ、そうそう、遼平君の隣りに居た子だ。遼平君に随分とかばわれていた子だね。遼平君は元気かい、坊や？」

「……実は遼のことしか覚えてないでしょ？」

「それが何かいけないかね？」と問われ、その満面の笑顔に悪寒を覚える。遼平のコトとなると、本当に楽しそうだ。

「フフフ……、彼のことを思い出すと今でも興奮してしまうよ。あの獣の瞳、破壊の肉体、死を呼ぶ声……フフフフ、実に、実に興味深い」

『闇』というよりは『邪』の笑顔で、独り何かの回想に浸っているルインに、純也は鳥肌が立ちまくる。街中だが、どうしても警戒して風を集めてしまう。

「坊や、私は今は仕事ではないのでね、緊張する必要は無いよ。非常に残念なことに、ね。フフフ……」

本当にただ歩いていて、カイロを貰おうと立ち止まっただけなのだろうか。カイロなどいくらでも作れそうなの、爆弾魔なのに……。……というか、このビーナスの手にカイロが収まっているのが、違和感ありまくりだ。

「……そうだ、坊やに預けたい物があるのだけれど」  
「な、何？」

ルインがコートのポケットに手を入れたので、つい条件反射で構えてしまう。しかし、出てきたのはあの爆弾がついたダーツではな

く。

「遼平君に……私からのクリスマスプレゼントだよ。渡してくれたまえ」

「……………はい？」

真っ赤な包み紙に、黒のリボンがされた……なんとも見た目的にも不気味な箱を渡される。送り主同様、この物体も何か黒いオーラを醸し出しているような。

「本当なら私自身が彼に会って渡したかったのだがね、ゆっくりと《芸術》について語りながら……フフ」

それはそれで、非常に危険な気がする。純也は、（最悪の場合、街が一つ消えるな……）と推測して引きつった笑みで箱を受け取った。

「おっと、扱いには注意してほしいな。そう、《充分、慎重に》、ね？」

「まさか、中身は爆——」

「ね、ねえ純ちゃん、この人……どちら様？」

今まで全く話に入れなかった李淵が、おずおずと純也に尋ねてきた。李淵は、ルインの微笑に思わず顔を赤らめている。まあ、普通の人間なら男でも女でもこの美貌には見とれてしまうだろう。

「すっごく綺麗な人だね、遼さんの……恋人、とか？」

「あ、あははは………違う、と、思うよ……うん。この人はね、破壊屋で《破壊の使徒》って呼ばれてるらしい、ルインって名前の―――」

「ぎゃあああああああああああーっ!!?」

純也の紹介の途中で、李淵は純也のマフラーを掴んで猛ダッシュで逃げ出していた。それはもう、音速に近い速さで。

「え、ちよっ、うわっ、リンリン!?!」

「殺されるうううー! まさかアレが『美の死神』だったなんて……っ、死ぬー!!」

「り、リンリン、その前に僕が死ぬ……マフラーで絞め殺される……」

「怖いよおおおー!」

思いつきマフラーを握られているせいで首が絞められ、顔面蒼白になっている純也に気付かず、李淵はひたすらカイロを道にばらまきながら疾走していった。

「フッフ、我が同胞よ、メリークリスマス。武運を祈っているよ、君の紅で私の芸術が完成する時まで……ね」

再び漆黒のフードをかぶった《死の芸術家》は、刹那に人混みに

消えた。



「へくしっ」

「遼平、また？ やっぱり風邪でもひいたんじゃないの？」

「そうかもな……なんか悪寒がしやがった。風邪よりタチの悪そう  
な……」

「誰かが遼平のこと噂してたりして？」

「……やめてくれ、嫌な心当たりばっかだ」

ここまでの寒気がするとは、相当の人物に違いない。ただの勘違いだと……思いたいのだが。

自分達を追跡している『愛の探偵団』（フェイズ参戦）には全く  
気付かず、遼平と希紗はレストラン街に入っていく。そろそろ昼食  
時だ。

「この店でいいか？」

「遼平の好きな店でいいわ。こんな喫茶店みたいな場所でいいの？」

「気楽に食える店の方が、いいだろ」

そう言って遼平がドアを押し開ければ、扉の上についたベルが軽  
快な音を鳴らす。

彼らが窓際の席に座ったのをいいことに、その窓にこそそと近  
寄る輩がいた。

「ねえ遼平、なんだか私達、外の人にじろじろ見られてない？」

「そうか？　なんでだろうな」

原因はもちろん、窓下アスファルトに這いつくばった奇妙な四人組である。

## 第二章『愛戦争、勃発』（5）



「はあ、はあ、はあ、はあっ……追ってきてないよね！？　ねえ純ちゃん……って、純ちゃんー！？」

随分と走ってきた寂しい街路で、やっと李淵はその異常な逃げ足を止める。ふと振り返れば、片手で握り締めたマフラーの先に、傷だらけで失神している少年。

「純ちゃんっ、どうしたの、誰にやられたの！？　まさかルイン！？　目を覚ましてっ、純ちゃああーん！！」

お前だ、お前。

両肩を掴んで激しく揺するが、青白い少年の顔は動かない。マフラーを解いてみたら、細い首に絞殺されたような紫色のアザがあった。全身の傷はもちろん、ここまで引きずられていろんな場所にぶつかった時の痕だ。

「ううっ、純ちゃん……そんな……なんでこんなことに……！」

だからお前のせいだってば。

自分が加害者であることに全く気付かない李淵の涙が、滝の如く流れていく。この人物の体内水分は九割を占めるのではないか。

「……っ、リンリン……？　あれ、僕は……？？」

「純ちゃん！？　生き返ったっ、良かったああー！！」

意識が回復した少年を思いっきり抱きしめて、やっぱり男は泣き続ける。純也は首の痛みと全身のかすり傷の原因が思い出せない。

「なんかよくわかんないけど……泣かないで、リンリン。僕なら大丈夫だから」

「俺、純ちゃんが死んじゃったかどうかと……とりあえず墓前に供えるのはやっぱり大漁旗になって……」

「……ごめんリンリン、それあんまり嬉しくないかも。っていうか、もう『大漁旗』から離れよう?」

李淵の価値観が、イマイチよくわからない。苦笑で上半身を起こして、純也はマフラーを巻き直した。

「リンリン、ところでカイロは?」

「あ……逃げてくる途中で落としてきちゃった……。どうしよう、もうバスケットが空になってるよ」

「うーん、まあ、良かったんじゃない? これでバイトは終わりになるよ」

歩道にカイロをばらまいたのではバイトにならないと思うが、もう半分以上配り終わっていたからなんとか平気だろう。「じゃ、休んでいこう?」という純也の提案で、自販機から温かい缶の緑茶を買ってくる。

「はい、一緒に飲もう?」

「ありがと……ホントなら俺がおごる立場なのに、ごめん」

「いいんだよー」とにっこり微笑んでから、純也は適当に使われ

ていなさそうな階段に腰掛ける。その横に李淵も座り込んで、二人でしばらく黙って緑茶をすすっていたが。

「ねえリンリン」

「なに？」

「さっきの話だけど……リンリンは、逃げてなんかないと思うよ。才能が無いからって本当に諦めた人は、過去を忘れようとする。練習してきたコトを、無かったようにする。でもリンリンは、まだ手品を使い続けてる。手品って、一度身につけても、毎日の練習が必要なんだよね？ リンリンは、辛い過去を思い出してしまうのに、毎日努力して手品を練習してる。……違う？」

「……うん、毎日何故か、練習してる。どうしてもだろうね、俺はマジシャンの道から逃げたのに。どうしてもこれだけは、やめられないんだ」

「それは、リンリンが強いからだよ。過去と向き合える、強い人だからなんだよ」

どうしてこの少年は、こんなに幼い身体でそんな言葉が言えるのだろう。一体、この少年は何者なのだろう。……そんな、李淵の不思議そうな表情。

「僕はいろんな人を見てきたんだ。過去と今でも闘い続けている人、過去の罪から逃げない人、過去に背を向けて拒絶した人、……過去が、無い人」



短い年月の中で少年が体験した、楽しい思い出、辛い記憶。本当に、様々な人と出会い、別れてきた。それらは確かに、純也の中で《何か》を生み出した。

純也は少ない記憶を思い返しながら、小さく微笑んでいた。けれど心の中は、とても寂しくて。

「リンリンには向き合える過去があって、そして未来がある。それってとっても、素敵なことだと思うよ」

笑みを向けてきた少年に、李淵は思わず『純ちゃんは?』という問いを呑み込んでしまった。この少年には、過去も未来も無いというのか……?

「ねえ純ちゃん……俺ら、友達だよね?　なのに俺、純ちゃんのコト、何にも知らない。俺は——」

「……………リンリン。僕は、リンリンの友達にはなれないんだ」

「え……」

初めての、拒絶。優しい声の、拒否。

俯いた少年の顔は、銀糸に隠れて表情が見えなかった。純也は、ゆっくり立ち上がる。

「僕はね……もうじき、ココからいなくなるんだ。独りでとても遠い場所へ……行かなければならない」

「どうして……いつ!？」

「……いつその時が来るかは、僕にもわからない。だけど、感じるんだ。旅立つ日は、近いことが」

寒さではない震えを抑えている少年の小さな肩は、見ているのがとても辛かった。心が痛むほどに。

おそらく少年は、その旅立ちを望んでいない。けれど連れて行かれてしまうのだろう、何かに……誰かに。

「きっと、リンリンにお別れを言う余裕も無いと思う。だからね、こんな僕とは友達にならないほうがいいんだ……リンリンが辛くなる、だけだから」

李淵には、純也の事情など少しもわからない。それでも、少年が苦しんでいることは、嫌でもわかる。他人に辛い想いをさせるのが苦しくて、自分自身が感じる辛さなどは考えない、優しすぎる苦悩が。

「……じゃあね、リンリン。バイト、これから頑張って！ バイバイ」

結局、少年は振り返らなかった。再会を望む言葉も、口にしなかった。ただ、明るい口調で走り去っていくだけ。

「純ちゃんは友達だよ……どんなに離れたって、君はずっと俺の大切な友達だよ……っ!!」

空き缶を握り締めながら、男は誓った。一生その言葉に背くまい、と。

### 第三章『愛の使者、参戦』（1）

#### 第三章『愛の使者、参戦』

「どうやら遼平はトイレで退席したようなやな」

「希紗チャンの様子ハ!？」

「いたって普通よ。どこか楽しそうね……」

「……おい、何故俺が地面に這いつくばらねばならんだ。押すな、この変態情報屋」

喫茶店の窓下で、囁き合う怪しい一団があった。やたらと周囲の一般人達の視線が集まる……のも、当然と言えよう。

「あらあら、もしかしてアレって真ちゃんじゃないのン？」

「ほう、奇遇でござるな。霧辺殿に違いない」

「へ?」

甘ったるい猫なで声と時代錯誤な言葉に、名を呼ばれた真が顔を上げる。

そこには、派手な紅色で、さらに毛皮のついたドレスを着た細身の熟年女性がいた。墨色の流れる長髪、化粧の濃い顔に、妖艶な微笑みを浮かべて。

更に、隣には額当てのような白いバンダナで前髪を上げた、黒ジャージで細目の青年。女性の荷物だろうか、買い物袋を両手にぶら下げている。

「梅はん！ それにシュンやないか！ いやア、久しぶりでんな」  
「そうねン、中野区支部のみんなに会いたかったのよン。若い男の子に、ね」

最後の一言と共に放たれたウインクに、真の笑みが引きつった。夫と親しそうなこの女性に、友里依が不審気な視線を向け、問う。

「シンっち……この人、誰？」

真の腕に抱きつきながら、少し嫉妬の瞳で熟年女性を警戒する友里依。それに、真は苦笑を深くする……本当に苦そうな。

「このお人はな、ロスキーパー本社で上級管理職についとる梅はんと、ワイの同期のシュンや。梅はんは、ワイの先輩……みたいなお人やな」

「『先輩』なんて堅苦しい関係じゃないわよン。真ちゃんが本社に居た頃から一緒だったものン、寝顔とか可愛かったわ」

「えっ、ちょっ、『寝顔』ってどういうコトよシンっち！」

「梅はんっ、誤解されるようなコト言わんといてえな！」

きつく腕を締める妻に、真は焦って弁解を梅に求めるが、クスクスと笑われるだけ。

「それに滯斗ちゃんもご無沙汰ねン。アナタもいい筋肉の付き方してて、お姉さんドキドキしたわよン」

「ええっ、滯斗くんも!？」

「貴様な……………いい加減にしろ、朽縄梅男」

滯斗の不機嫌なため息混じりの言葉に、「いや〜んっ、その名前で呼んじゃイヤっ」と身体をくねらせる梅……………もとい、朽縄梅男<sup>くちなわうめお</sup>。

「梅男って……………この人、男!？」

「あはは……………まア、そーゆーコトなんよ、ユリリン」

「アタシのことは『梅』って呼んでって言ってるじゃないン、そんな無粋な名前はイヤよン」

「やかましい、その女々しい口調は止めろと言ったはずだ、朽縄」

毒を吐き捨てるように言う滯斗に、梅男は「相変わらず無愛想なのねン」と残念そうな声色を使うが、表情は楽しそうだ。

「朽縄殿、からかわれるのはそれくらいにしておいたほうが良いかと。霧辺殿には心に決めたおなごが居るようですし、紫牙殿に冗談は通じませぬぞ」

ずっと黙って無表情だった青年、シュンが低いバスの声で忠告する。彼もまた、少し可笑しそうに口元を緩めているが。

「わかってるわよン、アタシの好みは、何と言ってもワイルドな遼平ちゃんだもの。彼は元気かしらん？」

「ふむ……………朽縄殿、どうやら霧辺殿方は蒼波殿を監視しているようでござるな」

「あら、そうなのン？」

「ははっ、相変わらざるの洞察力やなア、シュン」

「拙者、これでも忍の端くれでござる。甲賀の名を継ぐ者として、当然にして必然に候ふ」

有名な忍者一族『甲賀』の生き残りである甲賀瞬<sup>こうがしゅん</sup>。彼もまた、ロスキーパー本社で影として働く上級者。

「なんだか面白そうじゃないのお、アタシも混ぜてほしいわん。だって遼平ちゃんはアタシだけのモ・ノ・だものン」

遼平……つくづく女運の無い男である。

「瞬ちゃん、アナタは先に本社に帰ってくれるかしらん？ 風薙のおじ様に、『面白いコト見つけたから帰るのが遅れる』って伝えといてン？」

「拙者も愉快な事は見届けたかったのでござるが……朽縄殿の伝令とあれば仕方あるまい。では、拙者はこれにて。御免」

そう言うと同時に、ジャージ姿の青年は消えていた。人混みに紛れるでもなく、跳ぶでもなく、本当に、霧散していくようにその姿を消した。

「えっ、シンっち、今の人消え……！？」

「ナルホド……今の瞬クンが、『ロスキーパー三大側近』の一人なんだネ？」

「あらン、見慣れない神父さんがいるじゃないの。アタシ、国際派も嫌いじゃないわよン」

ずっと今までフェイスが口を挟まなかったのは、おそらく情報屋としての癖だろう。軽い笑みを浮かべてはいるが、彼の灰色の瞳はずっと《観察》していた。

「聞いたコトがあるヨ、カツテ風籬社長の下に集った、一騎当千の守護者達。その《三大側近》に、コンナ所で会えるとはネ……しかも」

フェイズの声色が、浮かれながらも強張っている。不思議そうな友里依は、フェイズの頬を伝う一筋の汗に気付いた。

「コノ人が三大側近中最強、ロスキーパー本社『上級警備隊』隊長、朽縄梅男……《猛将スネーク・チャーマー》だなんて」



### 第三章『愛の使者、参戦』（2）

「あらあら、物知りなのね、神父さん。でもあんまり口を滑らせちゃう子は……短命よん？」

《蛇使い》……否、蛇そのもののような狡猾な瞳を、一瞬だけ梅男は宿す。それを受け取ったフェイズも、不敵な笑みを浮かべて。

「オウ、ソーリー。有名な人に会えて、チョット興奮してしまったダケだヨ。ミス梅、ご無礼を許してほしいネー」

「いやんっ、神父さんってばジェントルマンなのねン。ちよっとタイプだわあゝ」

緊迫した空気は一瞬で消え去り、お互いが笑い合う。……何か、不吉なオーラを漂わせながら。

「で、真ちゃん、どうして遼平ちゃんを監視してるのかしらン？」

「あー、それが……どうやら希紗とデートしとるみたいなんですわ。それで、つい気になってしもうて……」

「まあっ、安藤さんとデートですって!？ 遼平ちゃんったら許せないわんっ、アタシという人がいながら!」

思わず素直に言ってしまったことを、真は頭を抱えて後悔する。たぶん、一番知られてはいけない人に言ってしまったと思うのだ。

「……ねえシンっち、まさかとは思うけど、遼平くんって梅さんの……?」

「それは絶対ちゃうわ。遼平、すんごく梅はんのコトが苦手でな…

…このお人のせいで、アイツは滅多に本社に行かんのよ」

以前、どうしても遼平が本社に行かなければならなかった時、偶然にも廊下で梅男と遭遇して……「逃げちゃイヤン、遼平ちゃん！」「近寄るんじゃねえカマ野郎オオオ！！」……と、本社のそのフロアが半壊する事態に陥ったことがあったのだと、真は説明する。

「……おい、妙なヤツが希紗に近寄っているが？」

「へ？ 誰や……？」

本来の目的を思い出し、自然と何故か梅男も参加するカタチで『愛の探偵団』は窓下に身を潜める。遼平はまだ戻っていないく、希紗の座ったイスの背もたれに手をかける男がいた。横から希紗を覗き込む男は、まだ若く、顔もそんなに悪くはなかった。だが、一目で水商売の人間だとわかる。

「な、なんですか？」

「キミ、今一人なの？ 俺の相手をしてくれないかな？」

「困りますっ、わ、私、今は友達と一緒に……」

「俺と遊んだ方が楽しいよ？ ちよっと店変えてさ、一緒においでよ」

これはいわゆるナンパ、というやつだと思うが、相手が水商売の人間となると危ない。若い婦女子など、良いカモも同然だ。

いかにも優しい笑顔で、男は希紗の腕を握る。希紗は困惑し、焦った表情で小さく「嫌ですっ」としか言えなかった。

「希紗……！」

意外にも、傍観者達の中で一番最初に立ち上がろうとしたのは滯斗だった。反射的に、腰のホルスターへ手をかける。

「待って滯斗くんっ」

それを制止したのは、友里依。滯斗のコートを引っ張り、無理矢理隠れさせた。

「……俺の女に手え出してんじゃねーよ、てめえ」

水商売風の男の肩に置かれた、大きな手。その威圧するような声に男が振り返ると、怒る漆黒の瞳とがち合った。

肩を掴んだ手の爪が、徐徐に食い込んでいく。筋肉が隆起する音と、男の微かな悲鳴を同時に響かせて。

「粉碎骨折がいいか？ それともこの細っちい腕ごと、もぎとってやろうか？」

そう言いながら口元を引き上げる間もずっと、力が込められていく。全身に冷や汗をかいた男は、許しを請う悲鳴をあげながら希紗から手を離し、逃げ去っていった。

「けっ、クズが」と不機嫌そうにぼやきながら、遼平は席につく。それを啞然と見ていた希紗は、座り直して。

「ありがと、遼平」

「お前、あれぐらいの野郎なんか追っ払えるだろ？」

「だって、今日は仕事じゃないから護身用になるような物持ってないし……いきなりだったし」

呆れた遼平の声色に、希紗は俯いていじけたように呟く。そんな彼女の仕草に、男は苦笑して。

「まあ、お前が無事だったからいいけどよ。……ったく、俺らは『友達』じゃねーだろっつの」

「え、聞こえてたの？ 遼平こそ、こんな所で『俺の女』なんて言わないでよ」

「じゃ、おあいこだな」と二人で笑っているところへ、ウェイターがコーヒーを持ってきた。

「シンっち……私なんだか、この二人もアリなんじゃないかと思ってきたわ……」

「あの遼平やけど……希紗も楽しそうやしなァ……」

「でも遼平くんなのよね……」 「けど二人ともエエ感じやしな……」 とブツブツ呟いて苦悩している夫婦の後ろで、今、新たな結束が生まれようとしている。

「ボクの希紗ちゃんを自分のモノ呼ばわり……許すまじデーモン遼平クン！」

「ムキーツ、アタシも遼平ちゃんに『俺の』って言われたいわぁン

！あのハスキーでワイルドな声で……なんで安藤さんののよっ！」

「「……！！」」

その時、二人の男（一人は自称美女）の間で、暗黙の内に強い団結力が誕生した。ガシッと堅く握手をする。

「ドンナ手段を使っても！」

「このカップルをンっ！」

「「引き裂かねばー！！」」

「……………もう、何でもいいから俺を帰らせてくれ……………」

地面にひれ伏された男の願いなど、叶うはずもなかった。

### 第三章『愛の使者、参戦』（3）

「ねえねえ遼平、ずっと前から訊いてみたかったんだけど」  
「なんだよ？」

コーヒーのカップを置いた希紗が、両肘を机について楽しそうに尋ねる。

「ほら、遼平が戦う時にたまに『覚醒の調べ』っていうの歌うじゃない？アレって、私達には何て歌ってるのか聞こえないのよね」  
「どんな歌詞なの？」

『覚醒の調べ』は、遼平の切り札とも言える蒼波一族の戦の歌だ。人間に聞こえる音域を越えた超音波であるために、敵はおろか仲間達も歌詞がわからない。

「ああ？ンなもん適当だ、適当。同じ旋律になってれば、歌詞なんて少しぐらい違ってでもいいんだよ」

「えー、本当に？じゃあ、正しい歌詞は？」

「……『我が名は蒼波、音を統べし者。陽よ、汝が力を我に貸し与えよ。闇よ、汝が力を我が身に宿せ。眠りし力、今解放を望む。――我、覚醒を望む者なり』、ってトコだな」

詩を棒読みするように、遼平は淡々と歌詞を口にする。わざと、旋律には乗せずに。

「へえ……、私達にも聞こえたらカッコイイのにー。ね、普通の人間にも聞こえるように歌えない？」

「あのなあ、この唄は身体能力の制御を解く音だ。下手すりゃ命に関わるんだぞ？俺だから時折使えるが、蒼波の血が薄いヤツにはもう身体が耐えられねえ技だ。もし一般人に聞こえる旋律を教えて、仮にも身体能力のリミッターが外れちゃったら……命は保証できねえ」

いつになく真剣な遼平の表情に、希紗はその重大さに気付く。彼が命を賭けて、戦いに挑んでいたことに。

「でも、『蒼波の血が薄いヤツ』ってことは、遼平の他にもまだ蒼波一族は生き残ってるってこと？もしかして遼平って、兄弟いたの？」

好奇心のままの希紗の問いに、遼平の視線が一瞬ふっと逸れた。机に乗せた肘の右手に、頬を添えて。紺髪が男の横顔を隠してしま

う。

「……俺には……姉貴がいた」

「お姉さん？いいな、私は独りっ子だから」  
「異常に蒼波の能力を受け継いだ俺と違って、もう血は薄かったがな。幼かった俺を、育ててくれたのは姉貴だ」

「……お父さんとお母さん、は？」

同じ職場で働いていても、仲間同士で過去を語ることはほとんど無い。裏社会なんて場所に居る人間の過去が、明るいはずがないのだ。

けれど。

けれど希紗は、訊いてしまった。遼平の過去……しかも、禁句ともされる『家族』のことを。

「……………親父が蒼波の人間で、お袋は一般人だった。親父の顔なんて、もう覚えてすらいねえ。俺が小せえ時に親が離婚して、親父は姉貴を引き取って消えたからな。お袋は蒼波の血を引く俺を嫌々引き取って……………それで……………」

「……………ごめん、遼平」

「別に……………お前が謝ることじゃねーよ。《定め》だったんだ……………全  
て」

それは『蒼波の末裔』としての運命だったのか、『破壊者』としての宿命だったのか。どちらだったとしても……………彼はその惨い仕打ちから逃れられなかったのだろうか。

「遼平くん……………」

「アイツ……………昔言うと思った、『俺は望まれない存在……………親にさえ望まれずして生まれてしまった、命』って。……………そんなん、理不尽やないか」

誰からも望まれなかった……………拒まれた命を生き抜くことは、どれほど辛かったのか。それを《定め》という言葉で片づけた彼の心境は、どこまで暗いのか。

闇だけの過去、光差すことのない未来。常人ならば発狂するであろうその暗闇の中で、強靱な精神ゆえに生き延びてしまった男。



それが幸なのか不幸なのか、誰も決められない……遼平以外は。

「ンな暗い顔すんじゃないよ、昔の話だ。俺だって今はマシな生き方してる」

にやついた遼平に、希紗も寂しそうなながらも微笑んで頷く。その笑みを見て、男は一言だけ低い声で。

「だから希紗、俺がお前らを裏切った時は、俺を殺しに来い」

「え……？」

目を見開いたのは、希紗だけではなかった。傍観者達も、その言葉に息を呑む。……あまりにも、彼の口調が真剣だったから。

「……なーんて、な。冗談に決まってるだろ、本気にすんなよな」

急に軽い口調に戻った遼平の、可笑しそうな笑い声。その笑顔を見ても、何故か希紗は安堵が出来なかった。

### 第三章『愛の使者、参戦』（4）



「ただいま。……って言っても誰も居ないんだよね」

自分で空しい眩きを零しながら、純也は玄関で靴を脱いでキッチンに向かう。買ってきた食品をスーパーの袋から取り出し、冷蔵庫に詰めていた時。

不意に、リビングの通信端末が着信音を鳴らした。「誰だろー？」  
と言いながら純也は端末の画面を覗いて、戸惑ってしまう。

「どうしよ……真君だ」

画面には、『霧辺真』という発信者の名前。もしかして本当に、依頼が入ってしまったのだろうか。今朝の遼平の、『もし真から仕事の連絡来ても、俺は寝込んでるってことにしとけ』という言葉が過ぎる。

何か……何か言い訳を作らなければ。とりあえず、着信ボタンを押して。

『お、純也か！？ 今大変なコトになったんねん。あのな、』

「真君！ あのねっ、待って！ 遼はね……遼は……その……」

携帯端末からであろう真の映像に、純也は懸命に嘘を考える。真が焦ったような顔をしているので、よほど急ぎの依頼かと思ったのだ。

『まさか……純也、知つとんのか?』

「あのねっ、遼はフグを食べてサソリを踏んで……じゃなくて、えーっとその……っ、……そう! アレだよアレっ、リウマチ性多発性筋肉痛で、寝込んでるんだ! だからねっ、今日は仕事に行けないんだ!」

『……はア? リウマチ?? いや、そうじゃなくて、今遼平がな、』

「本当にゴメンね真君! 僕、遼の介護……じゃなくて看護があるから、もう通信切るね! じゃあねっっ」

『え、ちよっ、純也待っ———』

何か真が言いかけていた気もするが、嘘をついてしまった罪悪感のために純也は気付いていなかった。これでなんとか誤魔化せただろう、とホッと安堵の息を吐いてから、ふと気付く。

「あ……せめて僕が依頼に行けば良かったんだ……」

……問題はそこではなく、二十代前半の男をリウマチ呼ばわりしてしまったところだと思うが、健気な少年がそれを悟ることはなかった。



「……切れてもうた……」

啞然と『通信終了』という携帯端末の画面を見ながら、真は呟く。何なのだろう、あのあからさまな純也の嘘は。

「遼平くん、純ちゃんに仮病を使うように言ったのかしら？　純ちゃんはやんはデートのこと知ってるの……？」

「んー、遼平のことやから、『デートする』なんて言わんと思うなア。きつと純也は知らんやろ。さて……これからどないする？」

喫茶店の窓下で、しゃがみこんだ五人は顔を見合わせる。店内では、談笑しながら食事している遼平と希紗。

「どうするも何も、もういいではないか。これは確実に逢引で間違いないだろう？　もうわかりきったのだから、終わりにしろ」

「滯斗くんはそれでいいわけ！？　このまま遼平くん希紗ちゃんが上手くいって職場結婚とかになっても！？」

「ソレは絶対に回避すべきダヨっ、希紗チャンが苦労するのは目に見える結果ネ！　あの甲斐性なしダメ人間ナンカを夫にしたら！」

「こうなったら真ちゃん、ここはあの二人の愛を試すのよ！　『仕事と恋人どっちを取るか』作戦よ！！」

真に詰め寄った梅男から、強烈なバラの香水の匂いがする。吐き気を必死に顔に出さないようにし、真は「作戦？」と訊き返した。

「まず遼平ちゃんの携帯に通信して、『急な依頼が入ったから、出勤するように』って言うの。もちろん、安藤さんは呼ばないわ。そこで依頼とデートのどっちを彼が取るのか、見るのよ！」

「そんな……いくらなんでも、デマの依頼で呼ばなくても……」

「ナカナカ良い作戦だと思うヨ！　欧米男性と違って、日本男性は恋愛より仕事を取る傾向がアルからネ！」

いつの間にか完璧に団結している梅男とフェイズ。『仕事』に対してマトモな責任感を感じている真は、その作戦には賛成しかねた。

「梅はん、なんか他にも方法が……」

「あらン？ 真ちゃんってば、アタシの立場がわかってるン？」

艶めかしく妖しい笑みを浮かべた梅男に、何か凄まじく嫌な予感がした。そこで、真は思い出してしまふ。

「アタシのバックに誰がいるのか忘れたのかしらン？ 《道化師》ちゃん提供の、こんなモノがあるのだけれど？」

梅男が取り出したのは、数枚の写真。《道化師》という二つ名を持つ本社一、いや裏東京一の情報屋、フォックスが提供したモノがマトモなモノのはずがない。

……案の定。

そこに映っているのは、短い黒髪の少年。少年のあどけない寝顔、苦手なグリーンピースを炒飯から取り除いている食事風景、スクランブル交差点で迷子になっている彼……他人に見られたくないような写真ばかりが、梅男の手にあった。

「うふふっ、初めて東京にきた霧辺少年、十五歳よン。これ、アタシの宝物なんだけれど……アタシのお友達（もちろん男）にも配っちゃおうかしら？」

「そ、それだけは……！」

「キャーッ、シンっち可愛いー！ 梅さん、この写真ください！」

「真貴様……グリーンピースが嫌いだったのか」

「ア、ボクも初めて東京にきた時は、スクランブル交差点で困ったネー」

「み、見るなアアア！ わかりましたっ、遼平に通信しますからっ

！だからその写真は封印してください……！」

思い出したのだ、この『朽縄梅男』という人物が、ロスキーパー本社のあらゆる権限を握っていることを。しかも、やたらとフォックスと仲が良い理由も、真は知っている。真にしてみれば、フォックスの裏切りも同然だったが。

涙ながらに、真は携帯端末のボタンを押していく。そして最後に通信接続ボタンを押して、すぐ喫茶店内の遼平を覗いた。

間もなくして、店内で鳴り出す遼平の携帯。

「さあっ、遼平ちゃんはどこっちを選ぶかしらん!？」

「ワイ、何て言えばエエンやろ……」

ところが。

遼平は端末を開くと、考える間も置かずに通信を切った。

「うわっ、あいつワイの名前見ただけで切りおった!」

「即答!？」 遼平くんってば、迷うことすらしなかったわ!」

予想外の結果に、五人はそれぞれ様々な反応をする。怒りだったり驚きだったり嫉妬だったり……。

「遼平、今の誰？ 出なくて良かったの？」

「いいんだよ、大したヤツじゃねえ」

そう言いながら、遼平は携帯端末の電源まで切ってしまった。

「こうなったら、今度は希紗ちゃんに通信するんだヨ！ 彼女なら通信に出るはずネ！」

「はア……ここまでやってしもうたら仕方ない、か……」

疲れた様子で、真は今度は希紗に通信。店内の彼女は、すぐにバックから携帯を取り出すと、遼平に「真からだわ」と告げた。

「は、はい、真？ どうしたの？」

『よ、よう希紗。その……えーっと……あのな、急な依頼が入ったんよ。今、ドコにおる？』

「今はちよつと喫茶店で食事してたんだけど。急な依頼なのね？  
じゃあ………あつ」

いきなり、遼平が横から希紗の携帯の保留ボタンを押した。それに驚いている希紗と、その他『愛の探偵団』達。

「ど、どうしたの遼平？」

「……真から、仕事の話だろ？」

「そうだけど……急な依頼なんだって、行かなきゃ……」

「行くな」

携帯を持った希紗の腕を掴んだ、遼平の真剣な眼差し。それに、つい希紗は赤面してしまった。

「まだ、お前の用事が済んでないだろ。依頼なんて、真と紫牙が行けば充分だ」

「で、でも滯斗が行くなら私がいないと……ノアが……」

「そんなに紫牙の野郎が心配か？ あんな感謝の欠片もねえ、無愛想が。お前は紫牙の道具か？」

「それは……」

俯いた希紗は、言葉が続けられない。その様子を興奮しながら覗いている四人とは違い、滯斗だけは壁に背を預けてその小さな声を聞いていた。

「……いいぜ、行けよ。お前が選ぶことだ」

「……………」

希紗はゆっくりと、携帯の保留解除ボタンを、押す。

「真、いきなりごめんね。依頼……悪いんだけど、私、行けないわ」  
『あ、あア、そうか。休日にすまんかったな、なんとかなるから心配せんといてや。じゃあな』

無理矢理引きつった笑みを浮かべて真は通信を切り、深く息を吐く。場の、妙な沈黙。



「一度命令しておきながら、最後は彼女に選ばせる……遼平くん、かなり巧みな高等技術を使うわね……」

「そんな優しさをちょっと垣間見せるところも素敵よんっ、遼平ちゃんったら！」

「ううっ、ボクの希紗チャンが……」

「なァ、漣斗」

携帯をポケットにしまいながらの、重たい真の声。その音に、誰もが押し黙る。

「あんたは、もっと早く何かに気付くべきやったんやないか」

淡い緑色の前髪が、俯いた男の顔を隠す。集まった視線の中で、漣斗はただ緘黙かんもくを続けるだけだった。

## 第四章『愛、乱れて』（1）

### 第四章『愛、乱れて』

「これじゃあ渋すぎるし、かといってこっちは子供っぽいかしら？  
うーん、ピッタリなのがないわね……」

「おい希紗……俺は何着持っていればいいんだ？」

もはや人間ハンガーとなりかけた、大量の服を抱える男。そんな彼の問いなど聞こえないのか、女はまだ服を漁り続ける。

「ねえ、遼平の服のサイズってLでいいのよね？」

「まあ、服の種類によっちゃMも着れるがな……」

紳士服専門店で、カジュアル売り場を歩き回る希紗に、遼平は散々振り回されていた。

「どうやら希紗ちゃんは、遼平くんに服をプレゼントするようね」

「遼平のやつ、面倒臭がって自分ではあんまり私服を買わへんからなア」

「希紗ちゃんに服を選んでモラエルなんて……ヤッパリ普段みすばらしい格好をしてるからカナ……」

「アタシだったらもっとハードな服を選ぶわよんっ！ 遼平ちゃんの肌が露出するようなロックな感じの……」

「……貴様らの勝手な見解は心底どうでもよいのだがな、一言だけ

言いたいことがある」

さっきから理路整然の如く進んでいる話を聞いて、漑斗は震えを抑えた声で言う。

「何故、俺達がマネキンの真似をせねばならんだ……!!」

五人並んで壇上でポーズをとったまま固まっている様子に、漑斗はついにツツこまずにはいられなくなった。だいたい、この五人の服装はあまりに統一感が無さ過ぎる。

ウールのロングコートを着た漑斗はまだ店に馴染んでいるほうだ。顔もマネキンより整っているぐらいだし。

だが、フェイズの神父服はどうだろう。二メートル近いマネキンなど、見たことが無い。いくら紳士服専門店といっても、神父服は無いだろう……。

梅男など、問題外だ。見た目は熟年美人女性に見える、など何のメリットにもならない。何故紳士服専門店で真紅のドレスマネキンがあるのか、誰か一人でも不審に思わないのか？

……更に。どこの世界に、サンタ風のパールックコートをまとい、抱き合った体勢の二体のマネキンがいるのか……！

「ボクは、結構ユニークな変装作戦だと思うネー」

「スポットライトを浴びて輝くのが、乙女の夢なのよん……!」

「だってワイら、この姿勢が一番落ち着くし。なァ、ユリリン?」

「そうよねっ、シンっち大好きー!」

「ワイもやアアー！」

「ええいつ、マネキンが喋るな!!！」

「「「自分が一番うるさいじゃーん」「」」と言われ、滯斗の浮き出た血管は限界点突破まであと僅か。

「っ……、兄上……俺はいつから人の道を踏み外してしまったのでしょうか……」

「……シンっち、滯斗くんがついにいろんなモノに耐えきれなくなつて独り言を始めたわよ？」

「あいつ、今まで自分が人の道を歩んでると思うとったんか？」

「ボク的には、地毛が緑色してる時点で人外だと気付くべきだったと思うネー」

「暗殺稼業をやっても迷わなかったのに、マネキンの変装でついに人生に迷っちゃったのねン」

己の人生を嘆く、低く小さな独り言に、傍観者達の冷めた言葉。その内濤斗は、社会を恨み、地球規模で呪いだしていたが、それはスルーの方向にする『愛の探偵団』。

「コレなんてどうかしら？　きっと似合うわ」

そう言って希紗が遼平に突き出したのは、白いVネックのセーター。遼平はとりあえず今まで持っていた服を全て棚に置き、それを受け取る。

「真っ白かよ？ 汚したらシミが目立つだろ」

「遼平、なんでそんなオバサン目線で選ぶのよ？ 汚さなきゃいいでしょ！」

「悪い、しょっちゅう純也が洗濯にうるさいから、つい……」

まだ服にシミをつけて同居人（少年）に怒られていたのか、二十歳。

一度は遼平に渡したセーターを両手で希紗は開いてみて、男の肩に当ててみる。

「んー……、着れそうよね。普段は黒系統の服ばかりなんだもの、清潔感が漂う色も絶対似合うと思うの」

「そうかぁ？」

「そうなの！」

こればかりは、希紗に決定権があるらしい。嬉しそうに自分で読んで、希紗はセーターをレジへ持っていくってしまった。

「希紗のやつ、遼平が普段着とする私服まで気にしとったんか……」  
「しかもあのセーター、最高級のカシミヤよ！？ すっごい値段が張るのに……」

「デーモン遼平クンに清潔感ナンカ似合うもんカー！」

「遼平ちゃんは上半身は何も身につけないくらいがワイルドでカッコイイのよんっ」

「……それではただの裸族では……」

マネキン置き場に立った変な五人を、店内・店外から様々な人が

奇異の目で見ている。それに気付かない変態達（自称『愛の探偵団』）に、聞こえよがしな咳払いが。

「お客様、ちょっと事務所まで来ていただけますか？」

「「「「は……？」「」「」」

笑顔をピクピクと引きつらせた店長が、サービススマイルのまま手を上げる。すると、後ろに控えていた十数人の店員達が、抵抗する奇妙なマネキン達（自称『愛の探偵団』）を、店奥事務所まで運んでいった。

「ちょっと、待って！　ワイらは怪しい者では……！」

「いやーんっ、アンタどこ触ってんのよー！」

「て、店長っ、コイツ男です！」

「よし、警察に通報しろ」

「ええええええー！？」

「……？　ねえ遼平、さっきの店、なんか騒がしくなってない？」

「何かのイベントだろ。変なマネキンがあったし」

不思議そうに振り返りながら店を離れていく希紗の横で、遼平が至極興味の無さそうな顔で空を仰いでいた。

## 第四章『愛、乱れて』（2）



「……っ……っ！」

突如襲ってきた激しい頭痛に、純也は身悶える。ズキズキと古傷が疼くような、酷い痛み。

座っていたソファに深く身を預け、息を荒くしながら天井を仰ぐ。嫌な冷や汗は止まらず、視界も霞んできた。

「……や、だ……嫌だよ……っ！」

必死に抗うように、耐えるように。声に出してまで、抵抗する。

この痛みに負けてはならない……その理由があるのだ。頭が痛みだした理由、それは。

遼平と出会った頃の記憶を呼び戻そうとしたから。

何かが……誰かが、その追憶を妨害しようとしている。この激痛はおそらくそのせい。

———《誰が》、邪魔しているのだ？

———《何故》、邪魔するのだ？

純也でも全くわからない。純也の記憶を隠すことで、得する人物



がいるとは思えない。

ならば、何故。

何故に、誰。

「どうして……っ？　僕は何を忘れてしまったの……？」

その過去を知っているとすれば、主治医の獅子彦。そして――  
――遼平。

糸が、切れる。

「あ……………」

今まで極彩色が混じり合ってカオスと化していた脳内が、一瞬で  
純白に変わる。

純也の嫌いな、大嫌いな、白色に。

あらゆる光を反射する、拒絶する色。冷たい雪の、色。

ボ  
ク  
ハ  
ダ  
レ  
？

「やめて……っ、やめてっ、やめてええええ!!」

届きかけていた指から、記憶の欠片が霧散していく。砂のように、こぼれ落ちていく。覚えていたコトまで、一緒に消えていく。

「……はあっ、はあ……っ、はあっ……」

また一つ、何かが消えた。その記憶が何だったのか、もうわからない。

もう、戻らない？

無意識のうちに倒れ込んでいたソファの上で、荒い息を整える。  
ふと、ソファ前の小さな卓上の人形が目に入った。うつ伏せの姿勢のまま、腕を伸ばして人形を掴み、抱き寄せて。

「ごめんね……遼、僕は遼を忘れちゃうのかもしれないよ……  
僕は、『純也』じゃなくなるかもしれないよ……遼……りよう……  
っ！」

紺色の髪を模した人形の頭に、穢れない雫が落ちていく。



「……！」

誰かに呼ばれた気がして、遼平は振り返る。けれど、見える限りは人の波。

「遼、平……？」

「ああ、悪い。なんでもねえ」

一瞬だったが雰囲気の変った男に、希紗は首を捻る。何故だろう、彼が何か焦ったように見えたのだ。

「まだ四時前なのに、暗くなってきたわねー」

「そうだな……空も晴れねえし」

二人で曇り空を見上げて、北風に吹かれていた。

「に、逃げ切れたか！？」

「大丈夫よ、もう追ってきてないわ！」

「滯斗クンの名演技のおかげネー」

「格好良かったわよん、『近寄ればこの者の命は無いぞ！』って店長を人質に取って銃を突きつけたところ、シビれたわんっ」

「俺はどこまで道を踏み外していくのだろうか……」

変態強盗団（自称『愛の探偵団』）は、人質に取った店長をそこに投げ捨てて疾風の如く逃走してきた。

人混みを掻き分けて、やっと遼平と希紗の二人組を見つけ、また

どこかに隠れようとした、そんな時。

「……真、多いぞ」

「ちっ、なんでこんな時にかぎって出てくんねん」

「理由は明快ネー。……アレがターゲットなんだから」

「下品な気配ねえ、こんな日くらい絶滅してくれないかしらん？」

友里依だけが、男達の言葉を理解できない。けれど、彼らの顔色を見てすぐに悟る……全員、《裏》の瞳をしていたのだ。

真が友里依を抱きかかえ、滯斗、フェイズ、梅男も瞬時にその場から消えた。

「《鬼》ダ……《鬼》ガイル……」

「横の女、美味そうだなああ……なあ、俺はあの女を食っていいかあ？」

「後にしろ、《鬼》の息の根を止めてからだ。《鬼》の女をゆっくりいただく……悪くないだろう？」

「潰せ、貪れ、消せ。俺達に『最強』の名を」

表街路が覗ける裏の横道の暗闇で、陰湿な声がひしめく。その無数の双眸の先には、笑いながら女と歩く紺髪の男。

「征けっ！  
れるのだ！」

《鬼》を斃し、その首をもって俺達が強き証を手に入

#### 第四章『愛、乱れて』（3）

一斉に駆け出した闇の前に、立ち塞がった影があった。表街路に背を向け、蠢く闇の者達の道を塞いだ五人が。

「なんだお前ら！　そこをどけっ」

「……ひとつ、人の恋路を邪魔するアホでエ、」

右腕に握った棒状の物体を肩に乗せた、訛りのある男の言葉。

「ふたーっ、不埒で無粋なおバカさんはン、」

妖艶な、皮膚にねばりつくような粘着質の甘ったるい声。

「みーっつ、ミンナで袋叩きにシテッ、」

見上げるほどの巨体そして、同じほどの大鎌。

「私達『愛の探偵団』が退治くれよう、月に代わってえ……惨殺よっ！」

その五人の中央に仁王立ちした、若い女がビシッと闇へ指を差す。

「ユリリンっ、『惨殺』はマズいって！　ここは半殺し程度でエエんよっ」

「えーっ、だってコイツらすっごく腹立つしー！」

「アタシは構わないわよん、惨殺でも拷問でも」

「俺だけ……台詞が無い……」

「澪斗クンは本当にタイミングが悪いネー。ホラ、今のうちに何か言っておけバ？」

急にトーンの上がった変な妨害者達に、蠢く闇達は動揺していたが、すぐに怒りの形相に変える。

「どけええ！ 《鬼》を潰すのは俺達だ！！」

「……ねえシンっち、これってどういうこと？ なんで遼平くんと希紗ちゃんが狙われてるの？」

「正確には、狙われとんのは遼平だけや。この裏東京で知らない者はおらん、紺色の髪を持つ《鬼》のこと」

友里依に危害が及ばないように肩を抱き寄せた夫に、妻は今更ながら不思議そうに問うた。真は、しっかり友里依を抱きながら闇を睨んで答える。

「なんで遼平くんは……」

「蒼波を『最低最悪の裏切り者』という呼び方をするのは、過去、スカイの傘下に居た者だけだ。他の者にとっては、『最強』の称号が新たな者に受け継がれたようにしか見えん」

「ツマリ、白鷹翼クンを殺した《邪鬼の権化》蒼波遼平クンは、現在裏東京で『最強』の名を冠する者なのサ」

「だからン、こういった下品な坊や達がその称号をめぐって、時間場所構わず襲うのよん」

至って冷静な言葉達に、友里依は「そんなん」と反感の声をあげる。彼はただ、平和に休日を過ごしているだけなのに。街を歩くだ

けで、襲撃されるというのか？

そんな理不尽が常識なのだ、この闇の世界——裏社会は。

「アタシ、確かにワイルドな子が好みなんだけど、アナタ達みたいな野蛮なタイプは嫌いな。消えてくれるン？」

「この……っ、クソババアが！！」

一番か弱そうな熟年女性へ、犬歯をむき出した男が突進していく。その様子に、真は「あーア……」と手遅れのため息を静かに吐いて。

野太い大蛇に絡みつかれた男の身体は呆気なく宙へ浮き、次の瞬間にはコンクリの壁に埋め込まれる。

「『美しいお姉様』と呼びなさい、クソガキども」

とても『お姉様』なんて呼べないようなドス低い声で、梅男は右手の大蛇……否、長い鞭を地面に叩きつける。まるで、獣を調教するように。

瞳に光るのは獰猛で狡猾な色。右腕の一払いで、一気に六人もの大の男が鞭で壁に飛ばされていく。まるで新体操のリボンのように、自由自在に大蛇を操る姿はまさに、『蛇使い』。

「あーア、あの梅はんを怒らせてもうた……ワイ、どうなっても知らんで」

「これしきの敵、朽縄一人で倒せるのではないか？」



「すごい……まるで踊ってるみたい！　バラが舞っているように見えるわ！」

「……ツテというか、本当にバラが降ってるケド？」

とても清々しそうな笑顔で、舞い落ちるバラの花の中を踊っている梅男。薄汚い路地がピンク色のバラに埋め尽くされていく。

「ああンっ、もっと、もっとよン！　瞬ちゃん、もっとアタシに美しいバラを……！」

「……まったく、朽縄殿は人使い……否、忍使いが荒くて困りまする」

今日聞いたことのある声に友里依がふと上空を見上げると、ビル壁に走るパイプに脚を引っかけて、逆さまの体勢でバラの花を撒き散らす青年がいた。

「シュン、今日もお疲れやな」

「霧刃殿、貴殿も戦ってください。朽縄殿だけに動かれては、拙者の身が持ちませぬ」

「わかったわかった、ならもう降りてこいや。久々に《動きを把握》しておかんと、また集められた時に厄介やしなア」

抱き寄せていた友里依の身体を離し、真は肩をほぐす。歩み始めた彼の横に、いつの間にか黒ジャージの青年。

「……情報屋、俺達の出る幕は無いぞ」

「オーケー。じっくり観察させてもらおうヨ」

表街路近くまで引き下がり、友里依と滯斗、フェイズは見つめる……闇に潜む多勢と、それに挑む三人を。

「瞬ちゃん、久々に《三大側近》で暴れたいのよン」

「このような輩……我らが風薙様の側近が相手することもありますまい？」

「エエやないか、久しぶりに三人で会えたんやし。手合わせ、願おうやないか」

それぞれが浮かべる笑みは、色は違えど明らかな余裕。形容できない空気……ついている隙など何処にもありはしない、三人の静かな闘志。

「アタシ達、《ロスキーパー三大側近》がお相手するわン、坊や達……この《猛将スネーク・チャーマー》が」

「ワイ、この二つ名あんまり好きやないんやけどなア……《聖罪剣士》、手加減はせえへんで？」

「下劣な輩には天誅を加えるのみ！ 《忍び刀のシュン》、殲滅して参る……！」

かつて風薙社長の下に集った、一騎当千の猛者達が今、再び牙をむく。

「《動》の章、第二技、閻魔！」

一刹那で、三回もの斬撃。木刀だから斬れないとはいえ、右膝、左胸、鳩尾を強打され、激痛で呻きながら男は失神していく。

左斜め後方、死角に立った男を真は蹴り飛ばし、反対側へも木刀を振るうが、上空がガラ空き状態。狂気か狂喜か、奇声を発しながら真の上空から刃を振り上げる者が三人。

「……今のワイらに、死角なんて無いで？」

黒く、何か短い刃が真の上空にいた者達を直撃、服を貫通して壁へそのまま縫いつける。混乱する頭で男達はその物体を見ると、二十センチほどの刃の、短刀のようなモノ。

魔法とは思えない……壁に両足を付けた青年が、重力に逆らって横向きに立ちながら放ったのだ……もはやこの時代で知る者少ない忍具、『クナイ』を。

「な、んだアイツっ、壁に……!？」

「ほう、壁伝いの技がそんなに珍しいでござるか？ 現代人は脆弱なり」

「は……っ？」

そう、今、前方の壁に立っていた青年を見ていたのに。声がしたのは、確実に自分の背後。恐怖すら覚えて、振り返れば。

「火遁・灰燼烈火の術ッ！」

青年の息から、一気に火炎が燃え広がる。それに驚いた者達は、腰を抜かしたり、逃げ惑ったりして一気にパニックに陥った。

「相変わらず敵には容赦無いなア、シュン。もうちょっと火力弱め

な、ホンマに灰になってまうで？」

「そう言う霧辺殿も相変わらず人情が厚いようで。抜かなければ、刃は錆びてしまいますぞ」

「ワイが抜刀せんでも勝てるんが、我ら《三大側近》、やろ？」

「ふふっ、そうでござったな。かつて三人で共に過ごした頃を思い出してしまいまする」

感情を表に出さないとされる忍者の、邪気の無い笑み。真と背中を合わせ、思い出しているのだろう。……過去、あらゆる苦楽を共にしてきたことを。

「いやーんっ、瞬ちゃんも真ちゃんがイイ感じで楽しそうじゃないン！ アタシももっと楽しみたいわんっ」

「あはは、すんません梅はん、真面目にやりますんで」

「朽縄殿の嫉妬も困ったものでござるな……霧辺殿、早めに片づけますかな？」

「せやなア〜」と苦笑を浮かべる真のどこにも、焦りなど見られない。けれど、瞳には油断の色も無い。軽い会話を交えているように、彼らは確実に闘志を集中させている。

「美しく舞いなさい、痛みは快樂よン？」

何重にも鞭を身体に巻かれた男は、梅男の腕一振りですぐ宙へ投げ出される。鞭を振り解いた反動で身体は回転し、やがて轟音と共にアスファルトへ落下、重力の何倍もの衝撃。

柔軟な大蛇は何度も男達を壁に叩きつけ、潰し、絡めとる。梅男の鞭が届く範囲は、シュンや真のフォローが要らない。

「……なんちゅーか、梅はんも相変わらず、やなア……」

「あの嗜虐的な振る舞い……非情に徹する拙者でも真似出来ませぬ」  
「シュン、あのなー、あーゆーのって現代では『S』って言うんやで」

「エス……？ 『江洲』？？ ふむ、現代語は奇なり……」

この青年、一体どんな環境で育ってきたのだろう。まさか、おとぎ話のような『忍者の里』出身とかなのだろうか？ ……あの風雑社長がスカウトした人物なら、あながち有り得ない話でもないから怖い。

「さて、一通り楽しんだし、そろそろ終わらせるわよん？ 久しぶりに《アレ》でいくわ。やれるわねん、真ちゃん、瞬ちゃん？」

「懐かしいでんなく、了解！」

「御意ッ！」

まだ半数近くの男が猛っているというのに、三人は最終形態に入る。残りの数、約三十人余り。

スッと三人が静かに息を吸う音。敵からの殺意など、もはや彼らの精神集中の前では無に等しい。

やがて、一番最初に眼を見開いたのは、シュン。地へしゃがんで左手をつき、右指で印を結ぶ。

そして。

「土遁・大地爆乱の術ッ！！」

男達の足下のアスファルトが一気に爆発、多くの巨体が軽々と宙へ飛ぶ。もちろんこれは、素早く移動しながらシュンが今まで密かに仕掛けていた地雷を起爆させたからだ。

「《静》の章、第四奥義、輪廻！」

足場が無くなって吹き飛ばされた男達よりも高く、跳躍する影があった。無防備に浮くその身体達を見下ろし、両手で構えた黒刃で素早く円を描き、刀が巻き込んだ風の渦ごと衝撃波を打ち落とす。その暴風、波動に一気に地面へ叩きつけられる者達。しかし、最後にして最悪の男が、この時を待ち構えていたのだ。

「散りなさい……坊や達はココで塵になるのがお似合いよん」

真の攻撃があまりに強力なために、地面に叩きつけられた後、一度だけ僅かに身体が跳ね上がる。その瞬間を、神業に近いその刹那を、梅男は待っていた。

ほんの少しだけ地から離れた身体を、大蛇の尾がうねりながら壁に、地に、肉体同士に、強打させる。真がわざと地に落ちるタイムラグを付けた順に、跳ね上がる者を刹那に見抜き、鞭は自在に敵へと伸びるのだ。

この三人の最終連携技を受けて、立ち上がった者は存在しない。存在し得ない。

圧倒的にして、必然的な、勝利。

静かになった裏路地で、アスファルトが砕けたせいで僅かに砂塵が舞う。倒れた無数のゴロツキ達は、後悔する一瞬さえ与えられなかったのだ。

「ああーン、久しぶりにたくさん暴れて、お姉さん大満足よン。二人とも、腕は衰えていないようね」

「……否、拙者としたことが、失態をおかしたようでごさる」

「っ、ユリリンっっ!!」

最初の一撃、シュンの術に巻き込まれていない者が僅かに数人、残っていた。彼らは空いてしまった空間、友里依達の方へ一斉に飛び出していく。

真が、その特殊な流派の移動術ですぐさま友里依まで駆け出す。フェイズも、滯斗さえも反応できない不意の突進に、一般人の友里依が動けるはずもない。

「シンっち……!!」

反射的に目を閉じた友里依に伝わる、温かな衝撃。妻を抱きしめた夫の左肩が、邪魔な女を切ろうとしていた刃物によって裂かれていた。

大切な愛妻を抱いた姿勢のまま、真は膝を落とす。友里依を護れた安堵を思った次の瞬間、真は出血する傷口も気にせずに表街路に振り返っていた。

咄嗟に動いた為に、忘れていたのだ。この男達の、本来の目的を。

「シンっち! シンっちっ、血が……っ!」

「ワイのことはエエっ、遼平と希紗がっ!!」

そうだ、彼らの目的は、《鬼》を殺すこと。もう表街路へ飛び出していってしまった男達を、真は追うことが出来ない。

「逃げろ……っ、遼平ー!!」

息を切らした真の、それでも必死な叫びは、《鬼》に届かない。



#### 第四章『愛、乱れて』（4）

「私、遼平って身なりに気をつければそれなりにモテると思うのよねー」

「ああ？ いきなりなんだよ」

希紗が、街案内の大きな看板を見ながらふと口を開く。先ほどからそこに立ち止まって看板で何かを確認している彼女の横で、遼平は訝しげな声を返した。

「だから、性格も荒っぽいけど面倒見の良いトコとかあるし、実は敏感だし。顔だってそんなに悪くないんだから、身なりをキチンとしたら女性に好まれるかもよ？」

「けっ、俺は、俺に合わせる女がいいんだよ。……それに……俺はこのままでいいんだ」

最後の一言は、騒がしい雑踏に掻き消されそうな、低く小さな声。その声色を疑問に思った希紗が遼平に振り向いた瞬間、いきなり、

抱きしめられた。

「りよ、う……へい……？」

「こういう日ぐらい大人しくしてらんねーのかよ、てめえらみてえなクズは」

呆れと嘲笑、そして憎悪のこもった声。右腕で希紗の身体を庇いながら、遼平の構えられた左腕はいきなり突撃してきた男の包丁に突き刺されていた。

「鬼め……死ねえええ!!」

そのまま男は、出刃包丁で遼平の左腕を縦に引き裂く。いきなりの刃物を持った男の襲撃に、周囲の一般人達が悲鳴をあげた。

「まったく、こんな表社会にまで出てきやがって……そんなモノで俺が殺せるとでも本気で思ってたのか?」

左腕に突き刺さった刃物を、遼平は腕の一振りで強引に投げ捨てる。そして、噴き出す出血にも関わらず、渾身の左アッパーを男にブチかました。

たったそれだけの一撃で、泡を吹いてアスファルトに倒れる男。だが、どうやらその後ろからも、同じような目的の男達が数人、こちらへ向かってくるようだった。

「……ま、今日ではめえら、運が良かったな。俺の機嫌がいいことに感謝しな、ザコども」

普段なら、場所などお構いなしで乱闘を始めるのに。何を思ったのか、遼平は突然、希紗の身体を抱き上げる。……いわゆる、『お姫様抱っこ』の体勢で。

「しっかり俺に掴まってろよ、希紗！」

「えっ、ちよっとっ、遼平ー！？」

先ほどまで見上げていた街案内の看板に飛び乗り、そこから低い建物の屋上まで一気に跳躍。強く遼平の首に抱きつきながら、希紗は空を飛んでいるような浮遊感に鼓動が高鳴った。……いや、もしかしたら、力強く抱いている、彼の体温に。

「にっ、逃げるのかっ、卑怯だぞ鬼！ お前は『最強』の称号を持つ誇りが無いのか！？」

「バーカ、『逃げるが勝ち』って知らねえのか？ 誇りなんぞ、ハナっからねーんだよ！」

「俺は結局、アイツに勝てなかったんだから……」という低い

眩きは、顔が近い希紗にしか聞こえなかった。低めの屋上から、凶器を手にした男達を見下ろす。

「午前の殺気はお前らか……？ いや、違うな、質が違い。生半かな勢いで来るんじゃないよ、俺を襲うんだったら……死ぬ覚悟をしてこい」

そう言い残すと、男は女を抱いたまま違うビルへと飛び移って消え去った。



「……シユン、あんた……わざと逃がして試しおったな？」

「はて、何のことか拙者にはわかりませぬな。……それにしても……蒼波殿の《守護者》としての確実な技量の成長、我が目で見届けたでござる」

表街路が覗ける位置に、『愛の探偵団』達は居た。真に疑いの目で見られ、シユンは微笑のまま肩をすくめる。そして、未だ膝をついた姿勢のままの夫を心配する友里依に、小瓶を渡して。

「霧辺殿に怪我を負わせてしまったのは、拙者の失態が故。これは甲賀に伝わる塗り薬でござる、どうかお納めを」

「あ、ありがとう……」

友里依が真の傷口へ薬を塗る間、梅男は裏路地の壁に寄りかかりながら、警察が刃物男達へ駆けつけていくのを他人事のように見ていた。しかし、ふとルージュの口元に笑みを浮かべて。

「瞬ちゃん、風薙のおじ様の退屈にも困ったものねン」

「はてはて、朽縄殿まで奇異なことを仰る。拙者は影として、駆けつけただけでござるよ？」

「もう、瞬ちゃんってば忍なのに嘘が下手ねン。アタシが『面白いことを見つけた』なんて伝言しちゃったから、おじ様のことですもの、瞬ちゃんを観察役にさせてくると思ってたわン」

「ふふっ、風薙様のご命令が無くとも、情報屋の性、拙者は観察に来ていたでござろう」

「好奇心は、情報屋の最高の武器にして最大の弱点でござるよ」と、小さく付け足して。「情報部部长も大変ねン」と、やはり他人事のような梅男の囁き。

「シンっち、痛む？ ごめんなさい、私が……」

「大丈夫、こんくらい全然平気やって。ユリリンが無事でホンマ良かったわ」

「すぐ無茶するんだものっ、シンっちが血を流すところ……見たくないのに……」

薬を塗り終わってから、友里依は心配そうに傷口へそっと指で触れる。その手を、夫は真剣な顔で握って。

「ワイはユリリンを護って死ねるなら本望や。ワイは、ユリリンを愛するために生まれてきたんやから」

「シンっち……………、やっぱり大好きー!!」  
「ワイだってええー!!」

泣きそうなくらい破顔しながら激しく抱き合う夫婦に、慣れている者と慣れていない者は対応が違う。

「漣斗クン…………これぞ神の領域の愛なのカナ…………?」

「情報屋、これを日本では俗に『バカップル』と呼ぶらしい。覚えておけ、そして絶対にこういった人間とは関わり合いになるな」

「中野区支部…………色々と大変なんだネ…………」

「…………まあ…………」

こんな変態情報屋にまで同情され、漣斗は深くため息を吐く。何故だか無性に、本社が恋しくなった。本社は本社で、変なオカマや老人がいるのに。

「さ〜てっ! 一悶着あったけど、『愛の探偵団』、再び追跡を開始するわ!!」

すっかりテンションを取り戻して立ち直った友里依の、堂々の犯罪一歩手前宣言。

「デモ、遼平クンをすっかり見失ッテしまったヨ? ドコマデ逃げたのかわからないし…………」

「問題ないわ、梅さんっ、シュンくん!」

「なにかしらン?」

「な、なんでござろうか？」

振り返って、友里依はどこからそんな自信が湧いてくるのか、確信の笑みを浮かべていた。

「梅さんは、『乙女の直感』で遼平くんがどっちに行ったか探ってください。シュンくんは、忍術でも忍法でもなんでもいいからとにかく二人を見つけて！」

「オツケェーイ、アタシの『遼平ちゃん探索アンテナ』がビビッと反応しちゃうわよーン」

「いや、あの、友里依殿？ 拙者の忍術はそう易々と使用が許されていないものでして……」

細い身体をくねらせて何やら怪しい動きを始めた梅男の横で、シュンは戸惑う。真に剣術流派の守るべき《道》があるのと同じく、忍にもルールがあるらしい。

「天下の三大側近の一人ともあろうシュンくんが、ウチのシンっち仲間に怪我させるような失敗したんだもの、それくらいやるわよ、ねえ？」

「ぎよ、御意……」

『なに軽々しく失敗してんだコラア、今度は役に立てよっ、ござる野郎！』（翻訳・シュン）という真っ黒なオーラを友里依の笑顔の背後に感じて、シュンは怯えながら疾風のように遼平と希紗を探しに行った。

「ゆ、ユリリン？ あ、の、ワイそこまで傷深くないし……シユン、今ちょっとだけ泣いて……」

「あの三大側近をここまで扱えるのは、裏社会広しと言えど、風薙と友里依だけかもしれんな……」

「乙女の愛は強し、ダヨー」

……この後、僅か五分で見事遼平達の居場所を発見してきたシユン（疲労困憊絶頂）のおかげで、『愛の探偵団』は再び動き出す。



#### 第四章『愛、乱れて』（5）

「……ここまで明るい場所に出てくれば、あんなやつらも来ねえだろ」

とても大きなクリスマスツリーのオブジェが眩しく輝く、広場の隅で遼平はやっと脚を止めた。少し疲れたような様子の希紗を、壁に寄りかかせて。

「悪いな希紗、俺のせいで邪魔が入っちゃって」

「わ、私はいいけど、遼平が怪我を……」

「あ？　こんなの、怪我の内に入らねーよ」

本人は笑っているが、流血で左手はもう真っ赤だ。希紗はバックからハンカチを取り出し、遼平の長袖を強引にめくって傷口を押さえる。

「……悪かった、希紗。俺の傍にいるヤツはみんな、俺と同じく狙われちまう。だから……本当は、誰も俺の近くに居ない方がいいんだ」

「もしかして……遼平が女性に近づかない理由って……」

「……愛してしまったら、その人まで狙われてしまうから？」

「ははっ、妙な勘違いすんなよ？　女の方が、俺に近づかないだけだ。これでいい、これでいいんだ……《破壊者》である俺は」

「何がいのよっ！　遼平は《破壊者》なんかじゃないって、みんな

な知ってるじゃない……純くんも、真も、漣斗も、私もっ！」

己を《破壊者》と断言する彼の瞳には、光が無い。……けれど、濁りも無い。純粹なる、漆黒。

その闇色の眼で、希紗を見据えて。

「……いいか、希紗。《天性の破壊者》ってのは、そいつが何もかも壊すだけじゃねえ。そいつの意志に関わらず、周囲も勝手に壊れていくもんだ。壊し、壊され、絶望して、最期は心の崩壊と共に肉体が散っていく。……天性の破壊者は、その《定め》から逃れられねえんだ」

その《天性の破壊者》だと言うのか、遼平は。彼の瞳にも声にも、迷いは無くて。嘆きさえ……無くて。

この男はいつから受け止めたのだろう、その悲しすぎる《定め》を。

「ねえ……、そんな《定め》なんか破ってよ……遼平らしくない、そんなのっ！」

「抗ったさ……俺は何度も、この《定め》に抵抗した。大切なモノを護ろうとした、《守護者》であろうとした。……結局、友を殺し、チビを壊し、俺の手は紅いままだったがな」

その濃い紅に染まった左手を見下ろして、遼平は自嘲の笑みを浮かべていた。にやついた口元はいつもと同じようなのに、明らかに、己の無力さを嗤<sup>わら</sup>っていた。

護れなかった、救えなかった、壊してしまった————愛してい

た命。

「……安心しろ、お前は壊さない。傷つけない。必ず……」

震える希紗の瞳の真意を誤解した、遼平の作られた優しさの顔。そんな男に、女は精一杯の声で。

「私が壊されるのが怖いんじゃないの！ 遼平が……誰の手も借りないで、独りで壊れていくのを見ているのが辛いのっ！」

「希紗……。甘いな、お前は本当に。お前は傷つけさせねえよ、俺が――――」

壁を背にして立っている希紗の顔の横に右手を押しつけ、遼平は顔を近づけて希紗の耳元で何かを囁く。その言葉に彼女は目を見開き、一瞬で頬を赤く染めた。

「きゃーっ、二人とも顔近いっ、近いわっ！」

「この空気って、このまま口づけとかになるんか……？」

「キツ、希紗チャンの唇は奪わせないヨー！」

「ちょっとアンタたちいつ、遼平ちゃんは何て言ったか聞こえなかったじゃないン！ もっと静かにしなさいよンっ！」

……やっぱり見ていた、不審者集団……もとい、『愛の探偵団』。物陰に隠れているつもりだろうが、さすがにシュンも参加した六人では、押し合い圧し合いで大変な状況になっている。

「ちょっと瞬ちゃん！ 今、遼平ちゃんが何て言ったのか、瞬ちゃんなら聞き取れたわよねン！？」 何て言ったのっ？」

地面に耳をつけて聞き取っていた……と言うよりは、五人に押し潰されてアスファルトにうつ伏せになっていたシュンの背を、バシバシと梅男が叩く。あれでは、喋ろうにも声が出ないだろう。

「朽縄殿……そろそろ我らは本社に帰りますぞ。これ以上、本社を我らが留守にするのはいささか危険故。風薙様も、報告を待っているらっしゃるでござろう」

「えっ、嫌よンっ、これからが盛り上がるトコロじゃないのン！ 遼平ちゃんはアタシだけのモノなのにいいーン！！」

「はいはい、良い大人でござろう、我が儘を言わぬように。……霧辺殿、本日は大変楽しませていただいた。我らは本社に帰りまする」

オモチャを買ってもらえず駄々をこねる子供のようにジタバタす

る梅男を、ズルズルと引きずりながら帰ろうとするシュン。彼に、引き留めの声をかけたのは真だった。

「待てやシュン、あんた情報部部长やろ？ あの性悪フォックスに、盗撮・盗聴やめるように言うとかや。他人に変な写真ばらまかんようになっ」

「ふふっ、あの狐めはそれが生き甲斐でござる故、きつとやめられないであろう。……まあ、耳には入れておくでござるよ」

「今日はロスキーパーの三大側近が見れて嬉しかったヨー。マタ会おうネ、シュン君」

「うむ、バテレンの情報屋よ、拙者も貴殿とはいつかじっくり語り合いたいものよ」

「オウ、ボクは一度も『情報屋』だナンテ言っていないケド？ さすがだね、ピエロ君」

「……貴殿も、あなどれぬな。ますます、いつか貴殿と会える時が楽しみになっただござる」

青年と外人は、純粹に楽しそうな笑顔を浮かべていた。まるで、旧知の仲の友のように。同業者にして異種族の、二人の情報屋。

まだ愚痴を零している梅男は無視し、シュンが一步を踏み出そうとした、その時。

「……シュン」

「なんでござろうか、紫牙殿？」

「貴様には聞こえたのだろうか？ 蒼波の、先ほどの言葉が」

疑問系になってはいるが明らかに確信を持っている滯斗の言葉に、

シユンは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「気になりますかな？ 紫牙殿」

「……………」

「シユンくん、聞こえたのなら私達にも教えてっ」

友里依と真、そしてフェイズと急に黙った梅男の視線が集まるが、シユンはただ滯斗の眼だけを見つめていた。……そして、わざと焦らした間を置いてから。

「蒼波殿の愛の言葉……実に清純であった。中野区支部が、拙者はとても羨ましいでござるよ」

その言葉を聞いて啞然としてしまった者達を残し、シユンはまだ残っていたバラの花弁を掲げた右手から風に乗せる。

桃色の花が降り終わった時、そこにはもうドレスの女性も、ジャージの青年の影も無かった。

#### 第四章『愛、乱れて』（6）

「あ、あ……、『愛の言葉』やてええゝ!?!」

青年が消えてしまつて随分と間を置いてから、やっと真の思考フリーズが解除され、言葉が口から出る。その声に、他の者達も我に返って。

「えっ、ウソッ、何て言ったのか気になるー!!」

「シカモ遼平クンの言葉に希紗チャンは顔を赤くして……嫌ダー!  
! ボクは……っ、ボクはこんなの認めないヨォォー!」

思いつきり絶叫をあげてから、フェイズはよくわからない英語（たぶん、遼平への罵詈雑言）を嗚咽の憐れなメロディーに乗せながら、涙を振りまいてどこかへ走り去っていつてしまった。……情報屋フェイズ、ショックのあまり、戦線離脱。

「フェツキー……あの人結局、何がしたかったのかしら?」

「何だったんやろなア……」

泣き叫んで走っていく目立つ外人は、何度も地面に転びながらやがて人波に消えていく。その後ろ姿を、夫婦は少しの同情の眼差しで見送っていた。

「くしゅんっ」

「おいおい、今度はお前か？ お前が風邪ひいたんじゃないの？」  
「ち、違うもん！ ちょっと寒くて……」

薄暗い空を見上げ、希紗は北風に身を震わせる。露出した小さな両肩をさすり、自分の両腕を抱いて、白い息を吐いていた。

「まったく、そんな肩出した服なんか着てくるからだ。……コレ、羽織ってろ」

「え、でもコレ……」

遼平は自分の着ていた革のジャケットを脱いで、希紗の両肩に羽織らせる。代わりに、遼平はラフなシャツだけ。

「本当に遼平が風邪ひいちゃうわよっ、そんな格好で……」

「いーから黙って羽織ってろ。お前の格好を見てるだけで寒いんだよ」

遼平から借りたジャケットは、確かに温かった。外気を通さない厚い革と、残された彼の体温と、不器用な彼の優しさで。

「ありがと、遼平。……あ」

恥ずかしそうに男物のジャケットを羽織った希紗は、不意に鼻先へ触れた冷たい感覚に、空を仰いだ。

「雪だ……」

こんな時期に……しかも数年ぶりの、雪。ほんの微かで、小さな小さな、粉雪。



「今年は厳冬だってニュースで言ってたっけ……ホワイトクリスマスになるのね、今年は」

「……………」

「遼平？」

口を微妙に半開きにしたまま、遼平は呆然と舞い落ちる白を見ていた。まるで、雪に……雪の何かに、心を奪われてしまったように。

「……希紗、悪い、ちよつと急用を思い出しちゃった。俺、帰るわ」

「え、ちよつと遼平っ、このジャケット！」

「ホントに悪い！　また明日なっ！！」

いきなり焦ったように走っていく男の背を、希紗は心底不思議そうにいつまでも見つめていた。

「シンっち、なんか急に遼平くんが帰っちゃったわよ！？」

「どういうこっちゃ！？」　デートを途中で放棄するなんざ、男として許せんぞ！」

独り残されてしまった希紗を遠目に見ながら、夫婦は混乱と驚愕に慌てる。何なのだろう、あの、遼平の不安と焦燥が混じった顔は。

「まさにこれから、って感じだったのに……『急用』って何かしら？」

「わからんなア……………、って、おい滯斗！？　どこ行くん！？」

今まで沈黙していた漣斗が、やはり何も言わないまま踵を返して歩き出していた。背を向けた彼に、思わず真は声をかける。

「……俺は確かに、最後まで見届けた。これでもういいだろう？  
……帰らせてもらう」

「漣斗……なア、あんたは、本当にこれでエエんかつ？」

立ち止まった男は、ふと粉雪舞う白い空を仰ぐ。そして、ゆっくりと、己に言い聞かせるような声で。

「希紗が幸福ならば、俺はそれでいい。仲間が笑顔でいられるのなら、俺は」

——何も、不快ではない。

あの氷見谷の一件以来、漣斗の中で何か変化があったのだろうか。  
『仲間』への、想いが。

また脚を踏み出して、もう男は振り返らなかった。ただ、微かに小さな言葉を。

「……もし希紗を泣かせるような真似をすれば、俺は蒼波を殺すかもしれないがな」

それが彼なりの冗談だったのか、本音だったのか、真にさえわからなかったが。

黒のロングコートの肩から僅かな粉雪を払い落とし、滯斗はこの場から立ち去っていった。

「……………ホンマ、ウチのヤツらは不器用なアホばっかや」

真の呆れと笑みが入り交じった白い吐息は、寒風にさらわれていく。

## 第五章『それは愛と呼ぶには儚すぎて』（1）

第五章『それは愛と呼ぶには儚すぎて』

ただひたすらに、走って、奔って。

ここから自宅まで脚で走るより明らかに電車やバスを利用した方が早いとか、そんな簡単なことさえ遼平は頭から振り切って。

電車をホームで待つ時間、バス停で立ち止まっている時間など、そこまで今の遼平に心の余裕が無いのだ。

早く、速く。

誰かに背を押されたわけじゃない。誰かに呼ばれているでもない。それでも、全力疾走で。脳裏に浮かぶのは、二年前のとある朝の出来事。

その日、純也がまだ居候になって間もない頃。外の世界を何も知らない純也を外に出させるのが不安で、一步も家から出させなかった。

前夜に警備があり、初めてその日、純也を夜も独りにさせた。そして運の悪いことに……その夜、雪が降ってしまった。

警備の巡回をしながら、窓の外に舞う白を、せいぜい「今夜は冷

えるな」ぐらいにしか意識しなかった。

浅はかだった。

早めに仕事を切り上げて帰宅し、家の扉を開けた途端、室内から寒風が吹いてきて驚く。外と同じぐらい、室内は冷えきっていた。リビングまで向かって、ベランダへの窓が開いていることにすぐ気付いて。そして混乱で停止しそうな頭を無理矢理動かし、次の瞬間、自分の心臓まで凍り付いて止まったかと思った。

雪吹き込んだ絨毯じゅうたんの床に、生氣も色も失った真っ白な純也の脚が、投げ出されていた。

焦って上半身を抱きかかえるが、純也の身体にはもう体温が無くて。何度名を呼んで揺すっても、死人のような白い顔は動いてくれなかった。ぐったりとした小さな身体は、恐ろしいほど軽い。

……本当に死んでしまったかと、思った。

どうして、何故、なんでこんなことに？

純也の名を口が呼ぶのをやめ、無意識の内に呟いてしまった。「俺の……せいなのか……？」——そんな当たり前のことを、今更、呟いた。

腕の中の少年のこと、何も理解していなかった。理解しようとしなかった。純也の苦しみも痛みも悩みも、何も、わかっていなかった。

その結果が、これなのか……？

氷のような純也の肌は、遼平の体温さえ奪っていく。その時、少しでも冷静になった耳が、微かな、本当に微かな鼓動の音を聞き取った。この冷氣に最後の余力で抵抗している、心臓の音を。

もう一度、純也の小さな身体を強く掴み、名前を叫ぶ。すると弱々しく瞳が開き、かすれた声で遼平の名を口にして、「おかえり」と。

……後になって、何故あんなことになっていたのか問い質してみたところ、「雪を見たら急に発作に襲われて、動けなくなり、そのまま気絶した」と少年は謝った。

遼平は酷く後悔した……口には出さなかったが、その『発作』が起きる病にさせたのは、遼平なのだから。ひたすらに「ごめんない」と謝る純也を前にして、遼平は握り締めた拳を必死に隠していた。

少年に真実を教えない、伝えることのできない自分はなんて卑怯で臆病者なのだろう、と。

——だから、誓った。もう二度と、あの白い闇の中で純也を独りにさせないことを。

幸いなことに、二年前の冬以来、東京に雪は降らなかった。なの

に、それなのに、今日に限って。

はやく、早く、速くっ。

もうあの時の二人ではない。純也だって、あの頃のままじゃない。そんなこと、わかっている。

けれど、胸騒ぎが止まらない。嫌な予感が、おさまらない。

はやく、ハヤク、早く、速くっ！

腕の中で目覚めない純也の冷たさが、リアルに蘇る。

純也は、強い。大怪我を負ったってすぐに回復するし、重い後遺症を患っていても生き延びている。……けれど。

時折、誰よりも心が弱くなる。とても幼い子供のように、ちょっとした精神的ショックで倒れてしまう。

遼平は思う。全ては、

「俺のせいなんだ……っ！」

人混みを掻き分け、裏路地を突き抜け、ただひたすらに走って、奔った。

理性と焦燥が思考の中で入り乱れて、薄いシャツが粉雪に濡らされて、疲労で脚がもつれても、男はたった一人の少年を想って走り

続  
け  
た。  
。



## 第五章『それは愛と呼ぶには儂すぎて』（2）



「……お帰り、楽しんできたかい、シュン？」

とあるビルの、自分以外は誰も居ない社長室で、風薙老人は巨大な窓ガラスから裏東京を眺めながら言葉を発した。

「風薙様、甲賀瞬、只今帰還致しました。遅くなり申し訳ございませぬ」

社長室の扉は、開いていない。けれど、確かに社長机の前に、跪いた体勢のジャージの青年がいた。

「悪かったねシュン、せっかくの休日だったのに散々だったようだね。また梅に振り回されたのかい？」

「朽縄殿を私室に押し込めるのは大変苦勞致しました。しかし、忍に休暇などあつてはならぬこと。風薙様は拙者をいつでもお呼び下さいませ」

シュンに背を向けたままの風薙老人は、「相変わらずシュンは堅苦しいなあ」と苦笑する。そんなところがまた、社長のお気に入りである理由なのだけなど。

「……それで、何か面白い収穫はあったかい？」

「はっ、実に久しゅうございましたが、かつての《三大側近》で戦闘を行いました。敵は三流以下の者達でしたが……朽縄殿、霧辺殿

の戦闘技術は確実に上達しております。拙者もより精進しなくては」

跪き、深く頭を垂れてシュンは報告を淡々と述べる。彼の声色には、一切の感情が無い。

「うん、梅の働きは最近ますますサディスティックに強烈になってるからね。そろそろ私から制止の声をかけておいたほうがいいかなあ……無駄だろうけど」

クスクスと笑いながら、風薙老人は北風に舞い上がっていく粉雪を遠目に眺める。老人は、何も動じた感じを見せない。

「真のことだけど……シュン、君から見ても、最近の彼はどうだい？」  
「霧辺殿は一見、愛妻殿に現を抜かしているように見えますが、部下の心情をよく把握し、いかなる時も広い範囲の状況判断を欠かしておりませぬ。まだまだ彼の成長も望めそうですね」

「そうかい」と実に嬉しそうな表情を老人が浮かべているのを、シュンは声色と気配で察する。君主である風薙社長が喜ぶことは、忠実なる家臣のシュンにとっても嬉しいことではあるが、まだ報告には続きがあるのだ。

「……君のことだから、きっと収穫はそれだけじゃないんだろう？  
良かったら私にも教えてくれないかな、とっておきのやつを」

やはりこの老人には全て見抜かれているのだと、シュンは口元をほころばせる。……それでこそ、我が主。

「蒼波殿の技量も、観察して参りました。風薙様も気になっている

のでございましょう？ 彼の力を」

「そうだね、私も遼平のことは随時気になっているんだ。……彼の、本性が」

「《守護者》か《破壊者》か、ですか？」

低められた青年の声に、やっと老人は振り返る。穏やかな微笑で、  
「ご名答」と囁いて。

「拙者にも……わからぬのです。あの者の肉体は、明らかに《破壊者》のモノ。しかも本人が自覚しているほど、天性的な。しかし、『護りたい』という強き意志、彼の瞳に時折映るあの優しき哀愁……何者よりも温かな漆黒の瞳。《残酷な破壊者》の肉体に宿ってしまった《優しき守護者》の魂が、拙者には見えるのでございます」

「風薙様は、どちらだと思いでございますか？」と、シュンの真剣な問い。それに、老人は「うーん……」と子供のような仕草で首を捻る。

「私は……それを見極めるために、彼を雇ったのかもしれないよ。蒼波の末裔が、幾度となく世界に絶望した彼が、どんな物語を紡ぐのか」

情報屋であるシュン以上に、この老人は遼平について何かを知っている。けれど、この老人にさえ、未来は見えない。……だからこそ、傍観を続けるのだろう。

「風籬様……貴方様は、どこまで真実をご存じで、何を望んでいらっしゃるのですか？」

「そうだねえ……。私はただ、見届けたいのだよ。光の《破壊者》と闇の《守護者》が辿る、その数奇な運命の結末を」

わざとヒントを与えたような君主の言葉に、シュンはより深く頭を下げてから、その場から霧の如く消えていった。彼のことだ、これからより一層、中野区支部を……遼平の周囲を調べるつもりなのだろう。

「……遼平、君は救えるかい？　闇を背負った己の宿命を……破壊の光を宿す少年を」

風籬社長にしては珍しい、僅かな憂いを帯びた声だった。

## 第五章『それは愛と呼ぶには儚すぎて』（3）



三重になっているセキュリティロックを解除し、玄関の扉を開ける。

そのまま暗い廊下を歩み、リビングに着いたところで照明のスイッチを入れた。ほとんどの物が白か黒の、生活感の無いモノクロな部屋に光が溢れる。

普段なら素通りする通信端末が置かれた小さなデスクの前で、ふと滯斗の眼が止まった。端末に、『着信一件有り』の文字が浮かんでいる。

「……？」

携帯ではなく、自宅用の通信端末に連絡を入れる相手に心当たりが無い。

端末のキーボードに触れ、着信履歴を確認。相手の名前を見て……滯斗はすぐさま通信をかけ返す。

『はい、氷見谷聖斗ですけど……って、あ、滯斗！』

違うパソコンのディスプレイを見ながら横目で通信に出た聖斗が、滯斗の顔を見た途端に一切の仕事を投げ出して嬉しそうに手を振った。双子にして真逆の性格である、滯斗の兄。

「兄上、俺の自宅に通信があったようですが、何かあったのですか？ すみませんでした、俺に何か用が？」

『何か用がなくちゃ、君に連絡しちゃいけない？』

「い、いえ、決してそういうわけでは……っ」

少しだけ上目遣いで哀しそうな声と視線を向けられ、漑斗は必死に首を横に振る。それが、お茶目な兄の演技だなどとは露知らずに。

『漑斗は全然連絡してくれないだもん、寂しかったんだよ。中野区支部の皆さんは、時折僕に通信してくれるのに』

「あの者たちが？」

『そうだよ、僕を氣遣って喋り相手になってくれるんだ。……本当にいい仲間を持ったね、漑斗』

今でも研究室に引きこもっているのであろう聖斗を心配して、漑斗も知らぬ間に同僚達が連絡していたなんて。弟は小さく、唇を噛み締める。

『それで……最近、希紗さんとはどう？』

「は……希紗、ですか？」

何故兄の口から希紗の名前が出てくるのか不思議そうな漑斗に、聖斗は呆れたような顔をする。

『もしかして、全く進展してないのかい？』

「進展、とは？」

『君たちの距離だよ！ 少しは近くなったかい？』

「距離?? いや、家を引っ越したりはしていませんが……」

弟の全く見当違いな答えに、聖斗は大きく失望のため息を吐く。それに動揺し、「い、いかなされました兄上!？」 俺が何かお気

に召さないことでも!？」とか焦ってる鈍感弟。

『……僕の口からはあえて言わないけど。でもさ、僕もそろそろ妹が欲しいかなー、なんてね』

その言葉に、弟がはっとして目を見開く。遠回しな言い方でやっ  
と気付いたかと、聖斗は安堵したのに。

「兄上……俺に女になれと……っ!？」

『…………ごめん、君って実は天然だったよね』

肩をがっくり落として頭を抱える聖斗を見ず、滯斗は俯いて小刻  
みに震えだす。

「兄上が、望まれるのなら……俺は……俺は女装でも……!」

必死に自分の中のプライドと戦いながら、滯斗は声を震わせて本  
気で道を踏み外そうとしていた。

『あ、待ってっ、滯斗ストップ! 意味違うから! ……さすがの  
僕も、女装癖のある双子の弟は勘弁だよ……』

よほど兄への忠誠心と自分へのプライドの葛藤が強かったのか、  
ついには滯斗は画面前で自分のこめかみにリボルバー式マグナムの  
銃口を押しつけていた。……死にたいほど悩んだのか、滯斗。

「では、どういう意味なのですか、兄上？」

『あはは、もういいよ、気にしないで。きっと君にも、いつかわか  
るさ。それに……特別な明後日も、君と祝いたかったんだ』

「兄上……俺は今すぐにでも、氷見谷に帰ります。しばらくお待ち下さいっ」

『あ、それはダメ！ 漑斗は、ちゃんと中野区支部の皆さんと居なくっちゃ。希紗さんの傍に、居てあげてよ』

にっこりと穏やかな笑みを浮かべる聖斗に、漑斗は押し黙る。画面には映らない彼の両手は、強く握り締められていた。そして、やや俯いて、兄とは視線を合わせずに。

「俺が希紗の傍に居る必要は、ありません。希紗に……俺は必要無い。俺は、希紗に恨まれても当然の男なのですから……」

———『あんな感謝の欠片もねえ、無愛想が。お前は紫牙の道具か？』

希紗のサポートを、当たり前のことだと思っていた。道具扱いも同然だ、彼女に憎まれていても、それは当然のこと。

独白のような弟の低い声に、兄は眼を細めて。何かを感じ取った聖斗は、『漑斗、顔を上げてごらん？』と優しく温かな声をかける。そして漑斗の戸惑いと困惑が絡み合った表情を見て、柔和に微笑む。

『君の心は、もう自由なんだ。少しずつでいい、周囲を見渡してみて？ そして漑斗自身の《想い》に、気付いてあげなよ』



漑斗はまだ、兄の言葉の真意がわからない。そして聖斗は、まだ弟が悟れないことを知っている。

そんな漑斗の鈍感で純情なところが、聖斗は好きなのだけれど。

『……じゃあね、漑斗。君の顔が見たい時はまた連絡するよ。……  
……君自身が幸せになれることを、僕はいつでも祈っている』

子供の頃から変わらない、弟の幸福を見守る笑顔で、聖斗は通信を切断した。

黒い端末画面に映った男の顔は、不思議そうな困惑のまま。

## 第五章『それは愛と呼ぶには儂すぎて』（4）



どれだけ走ってきただろう。時間の感覚も無く、どこをどうやって走ってきたのかさえよく思い出せない。

ただ、いろんな回想が頭をめぐった。

雪の中で倒れていた、少年。

警戒心など欠片も無い、透明で無邪気な笑み。

ただひたすらに、自分のことを信じて名を呼び続ける声。

そして遼平の《定め》に呑み込まれ——化け物となっていく  
小さな身体。

……全てが終わった時、少年は心も身体も壊されていた。

粉雪は勢いを増し、一人の男の願いなど嘲笑うかのように降り続ける。シャツはもう濡れきっているのに、遼平は全力疾走で熱くしょうがない。

ようやく自宅のアパートが見え、階段を駆け上がって、部屋の扉を乱暴に開いて。

「純也！ 純也あっ！」

玄関に、靴がある。純也は家に居る……けれど、返事がない。自分の靴を脱ぎ捨て、リビングへ向かう。嫌な鼓動の早鐘が、鳴りやまない。

とっさに二年前と同様に窓を見たが、ちゃんと閉まっている。室温も、そこまで寒くはない。純也は——ソファに横たわって瞳を閉じていた。

ゆっくりとソファまで歩み寄り、純也の顔を覗き込むと、少年は静かな寝息を立てている。

「……はああー……」

安堵と、拍子抜けの声。それと同時に全身の力が抜け、今までの全力疾走の疲労が一気に襲ってきて遼平は絨毯じゅうたんにしゃがみこむ。

「俺……バツカじゃねーの……」

己に呆れている声色を出しながら、内心では本気で『良かった』と。そして疲れきって重たい身体で立ち上がり、毛布を出してきて少年にかけてやる。

「つたく、そのまま寝たら風邪ひくだろうが………あ？」

ふと、純也が何かを抱きながら眠っていることに気付き、ソレを覗く。紺色の髪に、いかにも目つきの悪いこの人形は……。

「これ……俺？」

取り上げてよく見ようとしてみたが、純也が大切そうに強く抱き

しめているのでやめた。その代わり、ソファ前の小さな卓上にある、もう一体の人形を手にとってみる。こっちが、純也の人形らしい。遼平には、こんな少女趣味のある人間が一人しか思い当たらない。純也も朝に「診察に行く」と言っていたし、絶対に獅子彦だ。相変わらずよく出来た人形だと感心していると、不意に微かなうめき声が聞こえた。あぐらをかいた遼平の前のソファで、純也が苦しそうな寝顔をしている。

……純也が夢にうなされているところを、何度か見たことがある。目覚めると本人はすっかり忘れているが、本当に苦しそうに。

腕を伸ばし、右手で優しく純也の白銀の髪を撫でる。何故かはわからないが、純也は頭を撫でられると精神が安定するらしい。『人肌を求めるのが幼い子供の本能だ』、と以前獅子彦に教わったが。

「お、と……………う……………さ……………ん」

「……………っ！」

瞬間、柔らかな髪を撫でていた手が、止まる。少年の閉じられた瞼から、一筋の雫が頬を伝って流れていく。途切れ途切れの声でもう一度、弱々しく「おとうさん」と口にして。

二年前、獅子彦に告げられた言葉が、今更になって強く蘇る。

『……………本当に、あの子を引き取るのか？』

『もう決めたんだよ。純也は俺が預かる』

『遼平……前も言ったと思うが、純也の記憶喪失の原因はおそらく精神的ショックだ。そして記憶喪失患者が何らかの出来事で記憶を取り戻せた時、稀に反動が起こる』

『反動？』

『記憶を失っていた時のこと……お前と共に過ごした時間のことを、忘れる可能性がある。完全に記憶を取り戻した時、純也は、お前を覚えていないかもしれない。……それでもあの子を、引き取るか？』

『それでも……かまわない。記憶が戻れば、それに越したことはねえじゃねえか。俺が純也を傷つけたんだ、償う義務が、俺にはある』

……あれから、随分と長い時間が経ってしまった。今、純也の記憶が少しでも戻ってきているのなら、覚悟をしなければならぬ。

純也の中から、『蒼波遼平』という存在が消える。だが、それで純也は、親元へ帰れる。

頬を伝っていく純也の涙は、止まらない。一筋の跡を残して、ゆっくりと雫は人形へ落ちていく。

「泣くんじゃねーよ……純也……お前には帰れる場所があるんだろ……？」

誰にも聞かれたことのない悲痛で弱った遼平の声音は、狭いリビングに響く。

純也の失われた過去が全て明るいモノだとは思っていない。記憶を消したいほど辛い出来事があったのだと、わかっている。

けれど。

けれど、純也を育てた人物が純也を心の底から愛していたことは、確証が持てる。

そうでなければ、こんなにも純粹で心優しい性格にはならないだろう。温かな愛情に包まれて育ったのだろう、この少年は。

———愛されたのなら、幸せに生きてくれ。

遼平は、自分が幸せに生きる必要は無いと思っている。……両親に、愛されなかったのだから。

だが純也は、愛されたのだ。なら、この少年に不幸があってはならない。苦しませてはならない。

「ん……、りょう……？」

寝ぼけてとろんとした眼をこすって、純也は起きあがる。本人は眠りについた自覚が無かったらしく、「僕寝ちゃってたんだ」などと呑気なことを言いながら。

「お帰り、遼。……どうしたの、服濡れてるし……」

紺色の髪からシャツまで濡れきっているのは一目でわかるし、疲労しているのだって純也は気付ける。きょとんと不思議そうに首を捻っている純也に、「人の気も知らねえで……」と小声でぼやく遼平。

「……なんでもねーよ、ジョギングだ、ジョギングっ！」

「遼がジョギング？　じゃあなんでそんなに濡れて……あ……」

窓に振り返った少年の瞳に、白が映る。舞い落ちる白を見て、聡明な少年は全てを悟ったようだった。

「……ごめん、遼」

「別に、傘持ってたから帰ってくるのに少し濡れただけだ。それに、また家の中に雪が入ったら面倒だからな」

「前……僕が窓を開けたまま倒れちゃったことがあったんだよね。あの時僕、遼の青い……」

……青い？

苦笑だった純也の顔が、急に呼吸も忘れたように呆然と止まる。そう、二年前のあの夜、純也は何かをしていた。遼平の青い……  
《何か》で……。

青い……何？

思い出せない。とても大切なモノだったはずなのに。とても好きだったモノのはずなのに。

「おい、純也？ どうしたんだよ、俺の何だって？」

「あ、ご、ごめん、なんでもない。なんでも……ないんだ」

いい加減冷えてきたシャツを着替えようと私室に戻りかけていた遼平は、震える少年の肩に気付いていない。襟付きのカジュアルシヤツに着替えてきた遼平は、まだ窓に背を向けたまま純也が俯いて立ち尽くしているのを不審げに見た。

「あのさ、遼……」

「あ？ なんだよ、どうした？」

純也が目覚めるまでの弱った調子は隠して、いつも通り遼平は口元をにやけさせて問う。少年はぎゅっと腕の中の人形を抱きしめて、意を決して顔を上げ、言う。

「もし、もし僕が遼のことを忘れても……それでも遼は、僕の傍に



居てくれる？」

## 第五章『それは愛と呼ぶには儂すぎて』（5）

——『お前と共に過ごした時間のことを、忘れる可能性がある。完全に記憶を取り戻した時、純也は、お前を覚えていないかもしれない』

純也の問いに、先ほどより強く、大きく、あの闇医者という言葉が脳裏に繰り返された気がした。

時が止まったように、少年の必死で健気な視線も、男の突然の無表情も動かなかった。

少年は、その沈黙が怖かった。男に拒絶されてしまうのではないかと。

男は、この静寂が恐かった。少年に自分の心が読まれていたのか、と。

それでも、彼は。

「……傍に居られるわけねえだろ。お前が、俺のことを全て忘れたら」

少年から顔を背けて視線を逸らし、遼平は低い声で答えた。その横顔の口が奥歯を噛み締めているのを見て、純也は心が冷えきっていく感覚に震える。

「そう、だよね……。僕、最低だね……。遼のことを忘れちゃっても、

一緒に居てほしいなんて。僕、すごく図々しくて、ワガママで、最低だ……」

純也らしくない、自嘲するようで自虐的な引きつった笑み。何度も何度も、己を叱るように、己に言い聞かせるように、「最低だよ」と小さな声で。

だが、いつまでも自分を蔑むことをやめない純也に、遼平が近づいて、白銀の前髪ごと強引に掴み上げて顔を上げさせる。

「違いよっ！ お前が俺を忘れる時は、昔の記憶を取り戻した時だ！ そうしたらお前は親元に帰れるんだぞ！？ いつまでも俺みてえな人間の傍に居たら……お前は幸せになれねえ！ だから、俺を忘れたら……記憶が戻ったら、ココから出て行け！！」

つい熱くなって怒鳴ってしまった後、純也の怯えた瞳に気付く。無理矢理荒く掴み上げてしまった髪を離し、前髪を直してやりながら、「わかったな」と念を押した。

「や……だ……、そんなの嫌だよ遼……っ、遼と離れたくない！僕はこのままがいいっ、遼と一緒に僕は幸せだからっ！ だから……傍に居て……」

純也がずっと抱いていた人形が落ちる軽い音と、シャツを引っ張られる感覚。見下ろすと、純也は両手にありったけの力を込めて遼平の服を掴んでいた。それが少年の、精一杯の意思表示。

「バカ言ってるじゃねえよ……所詮、お前と俺は赤の他人なんだぞ？ お前だって、俺を忘れたらすぐに親元に帰りたくなる。どっち

みち、記憶が戻ればお前は自然と帰るべき場所へ帰るんだ」

「なら、僕は昔の記憶なんていらない！ 遼と離れたくない……遼を忘れたくない……家族なんていらないから、ココに居させて！」

ついに涙を堪えきれなくなって泣き崩れていく純也と一緒に、遼平は床に両膝をつく。純也にシャツの裾を握られているから仕方がなかったようにも見えるが、彼の力なら、その気になれば少年の握力など振り切れる。それでも共に床に膝をついたのは……遼平の無意識の内の深層心理のせい。

男は、心に深い罪悪感を覚えながら、突き放す言葉を口にした。

「……でも実際、忘れてるんだろ？ 俺のこと」

「え……」

「『風車』<sup>かざぐるま</sup>。……さっきお前は、青い『風車』のことを言いたかったんじゃないのか？」

その言葉に、純也はようやく思い出せた。そんな自分が、とても悔しい。あんなに大切なモノのことを、忘れていたなんて。アレは遼平が作ってくれた……純也の宝物なのに。

「違っ、違うんだよ遼っ！ 僕は忘れたくないのに、頭が勝手に……僕はっ」

「……それでいいんだ、純也。俺のことなんか、こんな汚い社会のことなんか、忘れていいんだ。何も怯えることはない」

いつになく優しげな遼平の声に、純也は必死に抵抗する。何度も首を横に振って、嗚咽を繰り返す。

「たすけて……助けて、遼……。僕の中から《遼》を消さないで……とても大切な人を、奪わないで……お願い、僕は遼の隣りに居たい……!!」

頭が忘れさせようとする《遼平》という存在を、絶対に忘れないように。身体に覚え込ませるように、遼平の左腕に抱きつく。

遼平は先ほど刃物で裂かれた左腕を掴まれた痛みも、それ以上の心の痛みさえも顔に出さず、ゆっくりと右手で少年の頭を撫でてやる。そして、温かく澄んだ声で。

「……わかった。お前との《約束》を放棄するわけにもいかねえしな、ずっとお前の傍に居てやる。純也、お前が俺の名を呼ぶ限り、俺を求める限りは、必ずお前のもとへ駆けつける。絶対だ」

嗚咽混じりに小さく「うんっ」という声が聞こえた気もしたが、弱々しすぎて確信が持てない。

けれど、安堵だろうか、その瞬間に純也の身体から全ての力が抜ける。倒れていきそうになった小さな身体を、遼平は焦って掴んだ。今日は疲れているのか、それともよほど遼平の言葉に気が抜けたのか、少年は涙も乾かないまま安らかに眠る。相変わらず軽い身体を持ち上げ、とりあえずソファに寝かせてやった。

「……………ホント、俺は根っからの悪人だな」

純也を寝かせて離れようとしたら、左手がまだしっかり握られて  
いることに今更気付いた。遼平は、その手を振り解かない。手を繋  
がれたまま、ソファの近くに座り込む。

『ずっと』とか『絶対』など、所詮は子供騙しの言葉。『永遠』  
と同じように、そんなモノはこの世に実在しない。

「俺の演技も、上手いもんだろ？　こうやって昔から人を騙して、  
裏切ってきたんだからな」

誰に言うでもなく、ふざけて自嘲するような呟き。昔から悪役、  
汚れ役、憎まれ役を何度も演じてきた。……そして今また、純粹な  
心を持つ少年を、騙した。

「お前は必ず、家族のもとへ帰してやる。どんなに泣き喚こうが、  
関係ねえ。わかってくれ……お前は、幸せになるべき人間なんだ」

そして男は、己をも騙す。

しっかりと握られた左手の温かさと、この手を離したくない衝動  
と、自分が忘れられていく心の痛みを、全て無かったことにして。

## EL『青と聖誕祭』(1)

EL『青と聖誕祭』

「おはよー、みんな！」

中野区支部事務所に、純也の明るい挨拶が響く。いつもの遅刻の時間ではないが、それでも全員揃っていた。

「おはよう、なんだか嬉しそうね、純ちゃん」

「あれ、友里依さん？ おはようございます、珍しいですねっ、どうしたんですか？」

真のデスクの隣りに座っていた女性に、純也は首を捻る。友里依が事務所に来ることは珍しい。

「いや、二人のその後を……じゃなくて、シンっちとその……アレよね！」

「せ、せやなっ、アレやな！」

「……なんだよ『アレ』って」

純也の後ろから、遼平も事務所に入ってきた。胡散臭そうな遼平の視線に、夫婦は固まる。大きな紙袋を持って上機嫌な純也とは逆に、遼平はあくびを連発してなんだか眠そうだ。

話題を変えようと、真はぎこちなく純也に話を振ってみた。

「な、なんや純也、嬉しそうやなア。エエことでもあったんか？」

「うん、あのね、サンタさんにプレゼントをもらえたんだ！」

とても純真であどけない笑顔で『サンタさん』などと口にした少年は、紙袋の中から青くて箱形の物体を取り出す。真達は、ソレに見覚えがあった。

「「あ、ソレ……」」

「これねー、オルゴールなんだよ。とっても綺麗な音楽が鳴るんだ」

真や友里依にも見えるように掲げるが、彼らはソレを既に見ている。昨日、遼平と希紗が選んで買っていたところを。

「ねえシンっち、これってどういうことっ？ アレが純ちゃんへのプレゼントだとしたら……」

「希紗はなんでや??」

顔を近づけてヒソヒソと言葉を交わすが、疑問が解けない。

「そうだ、遼、これは僕から」

思い出したようにまた紙袋をあさる純也に、遼平は「あ？」と自分のデスク前のイスに座りながら少年を見下ろす。

少年が遼平のデスクに置いたのは、白い大きな箱。それを開けると、甘い香りがふわっと漂う。



「……ケーキ？」

「ちよっと早起きして、作ってみたんだ。紅茶のシフォンケーキ。……誕生日おめでとう、遼」

市販されているのと同じくらい完璧な小麦色の丸いケーキを前にして、遼平は目を見張って純也に振り返る。純也は、満面の笑みで「おめでとう」と繰り返した。

「わーっ、純くんのケーキ美味しそう」

「相変わらず純也は器用やなァ」

「えっ、今日って遼平くんの誕生日だったの!？」

希紗達も身を乗り出して純也の作ったシフォンケーキを覗く。そういえば今日、十二月二十五日といえば、遼平の誕生日。随分と似合わない日に生まれたものだど、よく他人に言われている。

「朝っぱらからやけに早起きして何かしてると思ったら……。ありがとな、純也」

「うんっ、お誕生日おめでとう!」

望まれずして生まれ落ちたこの命を、今、目の前の少年に祝われている。その感覚は遼平にとって慣れないものだけれど、決して心地の悪いものではなかった。軽く少年の髪の上に手を置いてやると、それだけで純也は喜ぶ。

「遼平って、今日で二十二歳になるのよね？」

「そうだな。……あ」

希紗の確認の言葉に、不意に遼平は何か気付いた。そして、にやりと悪魔っぽく口元を引き上げて。

「そーだ、俺は今日から二十二歳だ！　紫牙っ、てめえと同じ歳だからな、もう年上扱いしねーぞ！」

ずっと自分のデスクで黙って読書をしていた漑斗に、遼平は勝ち誇った笑みでビシッと指を差す。その言葉を聞いた漑斗は、軽く吐息を零してから本を開いたまま横目だけ一瞬向けた。

「……貴様から年上扱いを受けた記憶など、片鱗も無いがな。人間とは生きた歳月ではない、積み重ねた徳で優劣が決まるものだ。……まあ、貴様のその天下も、所詮は今日限りだな」

「ああ！？　どういう意味だよっ、紫牙！」

漑斗が本の活字を追う視線は、止まっていない。それでも遼平の言葉を聞き取り、鼻で嘲笑って答えてやった。

「明日、十二月二十六日が、俺の誕生日だ」

「はあああ！？」

「本当なのっ、漑君！？」

「あんた、誕生日が遼平と一日違いだったんか！？」

うるさい周囲の驚きの声を聞いているのかいないのか、漑斗は涼

しい顔で読書が続ける。普段の遼平を真似たのか、口元を引き上げて「せいぜい今日一日を楽しめ、蒼波」と皮肉たっぷりの言葉を。

「ねえ……漑斗っ」

「……希紗？」

いつの間にか漑斗の横に立っていた希紗に、漑斗が本から目を離して見上げる。希紗は顔をやや赤くさせながら、息を吞んで、漑斗を見つめた。

「一日早いけど、誕生日おめでとうっ！」

「……………は？」

彼女が背中に隠していた紙袋を言葉と同時に突き出し、頭を下げる。漑斗はその紙袋と希紗の顔を交互に見て、混乱を隠せない。

「貴様……何故俺の誕生日を知っていた？ 俺は今まで誰にも言ったことがないぞ」

「聖斗に……教えてもらったの、二人の誕生日。それで、昨日プレゼントを買ってきて……」

いつもはうるさすぎるぐらい明るい希紗の声が、どんどん小さくなっていく。もう耳まで真っ赤にしている状態。

目の前の急展開に、真と友里依は驚愕し、そして遼平に詰め寄る。彼の両肩から顔を出して、微かな声で。

「これってどーゆーことやねん、遼平！ あんた昨日、希紗と一緒にあったやろ！？」

「ああ、一緒だったぜ？ 変なやつらに跡をつけられてたけどな」

まるで何でもないことのように、さらっと答える遼平。すると今度は友里依が。

「遼平くん、私達の追跡を知ってたの！？」

「……お前ら、本当に気付かれてないとも思ってたのか？」

今度は完璧に呆れた声で、遼平はため息を吐く。あれだけの大人数で騒いで、蒼波の耳に届かないほうがおかしいのだ。

「希紗に頼まれたんだよ、『男物の服を買いきたいけどサイズがよくわからない』ってな。それで、紫牙と体格が近い俺が連れて行かれたわけだ。その代わりに俺は、純也へのプレゼント選別に協力してもらったんだよ」

低い小声で、真と友里依にしか聞こえないように遼平は話し出した。

「い、いつからワイらに気付いてたん？」

「妙な音がするのはオルゴール店あたりで気付いていたんだが、確信を持ったのは喫茶店だったな。悪寒が走るような粘着質の気配を

感じて……耳をすませてみたらあのカマ野郎の声ができるじゃねーか。ぶん殴りに行ってやろうかと思ったが、希紗は全く気付いてなかったからな、やめた」

どうやら遼平は、その特殊聴覚よりも梅男の発する粘着乙女オーラで気付けたらしい。……恐るべし、猛将スネーク・チャーマー。

「じゃ、じゃああのいかにもカップルみたいな雰囲気は何だったの！？　ちよつと遼平くん、そのところ、詳しく説明しなさいよお！！」

両肘を組んで背後から首を絞める友里依に、遼平が「ちよ、ぐあつ、息が……」とかうめき、真が「ユリリンあかん！　プロレス技かけたらあかんって！！」と妻を制止させようと必死になる。

意識が遠のきながら遼平は「せつ、説明するから……」と、か細い声を出してギブアップのサインをする。それに頷いて、「わかりやすく、ね？」と黒い笑顔をする友里依に、一体世界の誰が敵うだろう。

「……お前らの中に、紫牙の野郎がいたろ？」

「い、いたけど……だから？」

煙草を片手で取り出し、くわえてライターで火を点けながら面倒臭そうに遼平は話し出す。……が、そのまま友里依達の視線を、両者固まったままの希紗と澪斗に向けさせて。

「俺に……コレを……？」

「ダメ、かな……その……漑斗には白いセーターとか似合うと、思っただけど……」

紙袋を受け取ってくれない漑斗に、希紗は不安そうな顔つきになっ  
ていく。漑斗は漑斗で、予測不可能だった事態に硬直しているだ  
けなのだが。

「だが俺は、貴様を……」

「え……？」

「貴様に恨まれても当然の男だ、俺には……」

不思議そうな視線を向けてくる希紗から、漑斗は目を逸らす。淡  
い緑の前髪で表情が見えないが、唇を噛み締めているような。

「恨むって、何のこと？」

「……」

いつまでもプレゼントを受け取ろうとしない漑斗に、希紗が涙目  
になっていくのがわかる。その目線に、漑斗は言葉が詰まり、自分  
自身の感情がわからなくなってしまう。

「や、やっぱり嫌かな、漑斗は人から贈り物を貰うのって……」

「そういうわけでは……。本当に俺でいいのか、希紗？」

「だって、明日は漑斗の誕生日だもの」

はにかんで微笑みながら、希紗はもう一度紙袋を突き出す。しば  
らく考えるような間を置いてから、やっと漑斗はゆっくりとソレを  
受け取って。

「……礼を言おう、希紗。その……日頃の働きも、今更だが………  
…感謝している」

滯斗らしからぬ発言に希紗は驚き、そしてやがて笑みを零して「  
どういたしましてっ」と嬉しそうに。

事の成り行きを嘩然と見ていた夫婦を我に返したのは、紫煙を吐  
きながらにやつく男の小さな声。

「……あいつらは、揃って不器用で鈍いからな。特に紫牙の野郎は。  
少しぐらい背中押してやらねーと、いつまでも同僚以上、恋人未満、  
だろ？」

「もしかして遼平あんた……わざと滯斗に見せつけて……？」  
「さあーな。俺は紫牙の野郎なんざ大っ嫌いだ、あんなヤツがどう  
なろうと知らねえよ。……けど、希紗には色々世話になってるし  
な」

相変わらず掴み所のないふざけた態度の裏に、真は彼の優しさを  
見る。『裏切り者』という名を背負っておきながら、仲間を想える  
彼に。

「で、でもちよっと待って！　じゃあ最後、希紗ちゃんに囁いた『  
愛の言葉』ってのも演技！？　何て言ったのっ？」

「あ？　ああ、アレは嘘じゃねーよ。本当のことを言ったまでだ」  
「本当のことって……遼平、何を……」

『お前は傷つけさせねえよ、俺が——紫牙に殺されるだろ、あいつの大切な女を傷つけちゃったら』

「へっ、お前らにゃ教えねーよ」

「ずるいわよ遼平くんっ！」

背中をバシバシと叩かれながら、それでも遼平は普段のにやついた笑みを浮かべて。あんな言葉、遼平はもう二度と口にすることがないだろう。……口にする必要が、もう無さそうだから。



## EL『青と聖誕祭』(2)

「あ、忘れてた！」

いきなりの純也の言葉に、全員が振り返る。少年はまたあの大きな紙袋に手を突っ込んで、何かを出してくる。

「あのね遼、遼にクリスマスプレゼントをくれた人がいるんだ。コレのこと、すっかり忘れてた」

「俺に？ 相手は女か？」

「え、うーん……確かに綺麗な人だけど……」

「はっ、俺も捨てたもんじゃねーな」と箱を受け取ってみると、真っ赤な包装紙に黒いリボンという……なんとも送り主のセンスを疑ってしまうようなモノ。それでも中身を確認しようと、リボンを解いた瞬間、『ピッ』と電子音が。

「……ピ？」

黒いリボンを解いた後、自然と赤い包装紙も落ちていく。現れたのは、『6』という不吉な秒数が刻まれた機械。そのメーターも一秒ごとにゼロへ近づいていく。

本能的に、遼平は危機を感じた。不思議そうに遼平の手中のプレゼントを覗いていた仲間達を蹴散らし、事務所の窓を開け、あらゆる限りの全力で機械を空へぶん投げる。

直後。

……綺麗な三連発花火が、真昼の冬空に見事に輝いていた……。

「わぁママ、花火だよ」

「あらあら、珍しいわねえ、こんな時期に花火なんて」

……とか下の方の道路で親子が会話しているのを聞きながら、遼平はゼイゼイと息を切らして窓からぐったりと腕を垂らす。

「あのー、遼？ 送り主さんね、ルインだ、よ……？」

「純也……それを一番最初に言えやコラアっ！！」

早足で戻ってきて思いっきり純也の頭を殴る遼平に、「痛いよ」と涙目になってしまう少年。だが、一歩間違えば今頃はこの事務所ごと美しく散っていたところだったのだ。

「ルインって……花火とかも作れるのね……」

「あははは……アレもあんたへの愛情表現なんとちゃう？ 遼平」

「あんな殺人的な愛情表現があつてたまるかっ！」

包装紙の白い裏に『楽しんでくれたかい？ 我が同胞よ』とか紅い字で書いてあるのを見つけ、遼平はグシャグシャに紙を丸めてゴミ箱へダンクシュート。

「じゃ、じゃあさ、仕切り直し！ 遼と滯君の誕生日、一緒にみんな

なで祝おうよ？」

少しの苦笑いも含んだまま、純也は提案をする。その言葉に、男達は同時に反応して。

「なんで紫牙の野郎と一緒になんだよっ！俺は嫌だからな！」

「こちらこそ願ひ下げだ。誰がこんな愚か者と同時に祝われるものか」

その答えは純也にとって案の定だったが、それでも少し寂しい気持ちがあった。だから、「そう、だよな」と呟きながらも悲しい苦笑になってしまう。

「純くん……？」

「いや、あのね、誕生日をお祝いできるって素敵なことだと思ったから、さ。生まれた日をお祝いするのは……『生まれてきてくれてありがとう』って言うことだと思うから。そんな素敵な日は、やっぱりみんなでお祝いしたいじゃない？」

純也の温かな笑みの裏の、寂しさ。それが何なのか、仲間達は気付けた。

……純也には、誕生日が無い。

そんな沈黙を破ったのは、真。遼平と純也の肩を後ろから両手で抱き寄せて、思いつきり宣言する。

「よっしゃ！ そんなら、今日を純也の誕生日にしよう！ 十二月二十五日、今日が、純也の誕生日！！ ……エエやろ、遼平？」

「お、俺は構わねーけど……」

「でも真君、僕は……」

「祝い事は一緒にパァツと盛大にやるのが一番や。その方が楽しいやろ？」

片手で荒っぽく純也の髪を撫でながら、真は最高の悪戯を思いついた子供のような笑顔で。

「誕生日……僕の、誕生日……？ おそろいだねっ、遼！」

「ああ……一緒だな」

「それなら遼平と純くん、漣斗の三人まとめて誕生日パーティーしましょっか！ あ、聖斗にも通信して！」

「希紗ちゃん、ナイスアイデアね！」

「……仕方ないな」

嬉しそうな純也を優しげな瞳で見やる遼平と、盛り上がる希紗と友里依、観念したようだが僅かに口元をほころばせながら本を閉じた漣斗を見て、真は想う。

きっと、自分たちは裏社会で一番の幸せな者達だと。

「……なア、純也」

「なに？ 真君」

「生まれてきてくれて、ありがとうな」

不意を突かれてきよんとした純也の顔に、可笑しくて少し笑ってしまったけれど。少年は微かに瞳を潤ませて。

「うん！」

この幸せな時が、仲間達との楽しい時間が、いつまでも続いてくれることを願いながら。

「みんな、誕生日おめでとうっ！！」

——いつまでも、みんなが笑顔で幸せにあれますように。

## EL『青と聖誕祭』(2) (後書き)

これにて、『闇守護業』第八話は終了となります。

今回も最後までお付き合い合いくださり、ありがとうございました！

何かお言葉を残していただくさと、大変作者の励みになります。  
迷惑ながらシリーズ続編も企画しておりますので、またどこかでお会いできることを願っています。

ありがとうございました!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5815c/>

---

闇守護業 8 《虹夜》

2010年10月17日01時54分発行